



創刊号

目 次

★ 創刊の辞

★ 共青同アツピール

革命運動の現段階と蜂起の抬頭

★ 日向一派批判

国際主義を洗い流し反スタ戦略論に

解体された日向過渡期世界論

★ フロント批判

旧巢=構改にもどつた反レーニン主

義者の理論的基礎

★ 沖縄斗争と我々の立場

1971.9

共産主義青年同盟理論機関誌

スロークン

- ☆世界革命戦争—世界プロ独を実現する世界赤軍を世界階級闘争の最前線に建設せよ！
- ☆帝国主義の侵略反革命軍事体系粉碎！ 社会帝国主義の武装反革命粉碎！
- ☆国際非合法党建設！ 帝国主義心臓部の蜂起＝内戦実現！ 民族解放戦争を統合せよ！
- ☆八派共闘＝ソビエト派解体！ 単一党の下、蜂起＝内戦をぎりひらく革命軍へ統合せよ！
- ☆安保粉碎！
 - 侵略・反革命軍事行動にのり出す日本帝国主義打倒！
 - ・日米帝国主義の侵略反革命前線基地＝沖縄を武装闘争の砦とせよ！
 - ・沖縄返還協定粉碎！ 自衛隊の沖縄派兵阻止！
 - ・入管体制解体！ 入管令撤廃！ 入管法再提出阻止！ 先制的反革命をめざす差別支配を粉碎せよ！
 - ・帝軍解体！ 小西叛軍裁判を闘いぬき、隊内叛乱を拡大せよ！
 - ・基地撤去！ 三里塚、北富士の英雄的農民とともに闘おう！
 - ・日共・革マル粉碎！ 日向一派をはじめとするソビエト派を粉碎し、八派共闘を単一党の下に再編せよ！
 - ・R G、赤軍、京浜安保共闘等、一切の武装闘争を拡大し、蜂起＝内戦をぎりひらけ！
 - ・破防法裁判、R G裁判勝利！ 革命組織に対する破壊工作を粉碎せよ！
 - ・帝国主義的労働運動の嵐に抗し、階級的労働運動を拡大せよ！
- ☆スターリン主義、反スタ・マルクス主義を粉碎し、革命的マルクス・レーニン主義を復権させよ！
- ☆闘う人民は反帝戦線に結集せよ！
 - 武装闘争の重層的組織構造を創出しよう！

キム創刊の辞

共産主義青年同盟

「崩壊の年、思想的・政治的混乱の年、党の混迷の年はすぎさった」、七〇年代闘争の更なる打ち固めと、戦闘体制の早急の確立が、わが同盟組織から大衆諸組織に至るまで要求され、その総力をあげた活動がプロレタリア人民の『蜂起』という答えにむかって突き進まなければならない時代に入っている。自からの立ち遅れを克服し、戦闘的な青年労働者・農民・学生を、この戦闘体制に組織し配置することが、また再びわれわれの任務になっている。

われわれの任務に対して与える答えは、「蜂起を組織する単一非合法党建設」として、如何なる階級的障害をも突破し留ってはならず、勝利することのみにある。わが手に「蜂起を組織する単一非合法党」を与えよ、かならずやブルジョア政治権力を打倒する。

実際、わが同盟の全人民的な青年の革命分子によって構成された共産主義青年同盟は、六〇年代階級闘争、否、全階級闘争の成果と蓄積をかけてこの責務を担ってきた。「蜂起を組織する単一非合法党建設」のボルシェビキ的組織規律と「プロレタリア国際主義」に満ちた革命暴力の思想に武装された、わが青年同盟の闘いは、プロレタリア人民の『蜂起』へ向って突き進んでいる闘いの中に、非合法―非公然に、合法―公然に体系的に持ちこまれ明らかにしなければならぬ。

わが青年同盟の闘いの一環として、共産主義青年同盟は、戦闘的青年労働者・農民・学生諸君へ政治理論機関誌『キム』をお送りする。わが青年同盟の機関誌活動は、プロレタリア人民の思想的・組織的オルガナイザーとして主要な闘いを生み出し、革命運動の理論的發展を飛躍的に保障するだろう。同時に、わが青年同盟の政治的・組織的・軍事的な成果を、自からの実践として権力に對する最前線に立ち、革命的大衆の最先頭に立って闘い抜くことによって証明する。

わが青年同盟は、かゝる戦闘の準備を完了し、戦闘の具体的な正しい戦略、戦術の行使を、「党の武装」―「党の蜂起」―全人民の武装の獲得の計画をより密にし、プロレタリア人民を支配階級に組織する能力を發展させ、自からの前衛性をブルジョアジーの打倒から全社会の根底からの革命の完了―共産主義社会の実現まで保ち遂行する。こうして当面するあらゆる実践課題に、革命的に答え、その実践を欠くことのない自己犠牲精神・英雄主義・革命主義で担いきり、戦闘的な青年労働者・農民・学生諸君との結びつきを強靱にし、階級闘争に未結集のプロレタリア人民をも獲得していく。

わが青年同盟は、自からの闘いに敵対する一切の日和見主義諸潮流を粉碎し、彼等を歴史の外に放逐する。

『百戦百勝の党』、わが青年同盟がそう呼ばれるのは近い未来である。

共産主義青年同盟全国委員会

中央書記局

目次

創刊の辞	2
共産同アピール	
革命運動の現段階と蜂起の抬頭	4
日向「過渡期世界論」批判	19
共革党(フロント)批判	35
沖縄斗争論	44
日米兩帝国主義の侵略反革命基地=沖縄を武装闘争の砦とせよ!	

革命運動の現段階と蜂起の抬頭

侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義
と対決し、蜂起戦争派の飛躍を獲ちとれ！

㉓ 中米会談と我々の態度

一九七一年七月十六日―新しい歴史的事件が全世界に衝撃を与えた。

新しい歴史的事件とは、「来年五月頃をメドにして」のニクソン訪中―中米会談である。誰の眼にも明らかな事態は、アメリカ帝国主義のベトナム―インドシナ革命戦争に対する侵略反革命の現実的破綻と危機の、アメリカ帝国主義による、帝国主義的―革命的収約として、進行していることである。我々は、この事態の分析から出発しなければならない。

遂行による帝国主義的矛盾の陰ベイという角度から見れば、将しく、新たな国際反革命同盟の再編の一環である。

戦後ヤルタ―ジュネーブ体制として確立した、アメリカ帝国主義の世界政治の中心軸は民族解放戦争の大陸革命への拡大を「民族国家」の枠内に押え、ソ連社会帝国主義を、その安全弁へと組織することであった。一方における、国際共産主義運動の最大のヘゲモニーであったソ連共産党と、他方における四九年中国革命を起点にする後進国・植民地国の民族解放戦争の拡大という時代を背景に、アメリカ帝国主義は、敗戦帝国主義（日―独―伊）の国際市場の権益の確保と、二度の戦争で疲弊した帝国主義列強（英―仏）の市場再分割によって、国際的利害の独占的保持―占有という、全くの強盜的論理から、ヤルタ―ジュネーブ体制の確立は死活問題であった。だが、このヤルタ―ジュネーブ体制は、部分的には、中国革命戦争―朝鮮統一革命戦争（四九年―五一年）によって揺さぶられはしたが、決定的に崩壊を始めるのは、中ソ共産党の「国際共産主義運動の総路線をめぐる党派斗争の激化と、ベトナム―インドシナ革命戦争を主軸とする国際反帝第三潮流の激成の前に、ソ連共産党は、レーニン以来の革命的―ポリシエビキの伝統をあらわ流したスターリン主義的変質の実態が、「第二インターの反動的復活―社会帝国主義」として「武装せる反革命」たる事が明かされるに出され、米帝の「良きパートナー」―ソ連社会帝国主義は、国際プロレタリアート、被抑圧民族人民からそのへ

① アメリカ帝国主義の狙いは何か？

ブルジョアジーは、自らの宣伝機関を総動員して、ニクソン訪中―中米会談の「実現」は、「第二のジュネーブ会談」であり、米中ソの「三極時代の到来」を、「インドシナ戦争の終結」で始めよう、としているとギマン的な宣伝で、ブルジョアの平和主義の幻想をばらまいている。

レーニンは、かつて、「戦争は政治の継続であり、帝国主義戦争も又、帝国主義的政治の延長であり、継続である」として帝国主義戦争を「祖国防衛戦争―民族戦争」として美化する排外主義潮流を打倒したことがあった。アメリカ帝国主義のニクソン訪中―中米会談は、将に、帝国主義的政治の反革命性・反動性という本質において変わらないばかりでなく、侵略反革命戦争の恒常的

デモニーを解体される、という危機を迎えたのである。

アメリカ帝国主義のニクソン訪中―中米会談に掛けた狙いは、単純に、「第二のジュネーブ会談」という風に、かつてのソ連共産党の如く、中国共産党を位置付けるところにあるのではない。即ちアメリカ帝国主義は、ベトナム―インドシナ革命戦争の前進の前に敗北した、自からの「政治的・軍事的後退」からの脱却のために、「平和共存」の対象をソ連社会帝国主義から中国共産党へ「乗り移った」のではない。

かつてのジュネーブ会談におけるアメリカ帝国主義が、そうであったように、アメリカ帝国主義は、全世界人民を欲しのままに、抑圧し、殺りくし、侵略し、隷属する帝国主義政治の基調を、国際プロレタリアートの団結の解体、具体的に言えば、国際共産主義運動の反動的再編、プロレタリア国際主義の基礎―世界究めぐる国際党派斗争への反革命的介入、これに定めてきたのであった。アメリカ帝国主義は、例えば、かつてのジュネーブ会談以降、ソ連共産党に次のような要求をしている。曰く、ソ連は「全世界を共産主義化する」計画を放棄し「自国の利益だけを考え、自国の人民が平和の条件のもとで幸福な生活をおくることだけを考え」なければならぬ。（一九五八年・ダレス演説）又、このように要求した。曰く「共産党の指導者がその世界革命の目標を放棄するまでは保障された恒久平和をうることは不可能である」、ソ連の指導部は、「共産主義が全世界で勝利するという幻想をすて、

そして、そこからひきつづき前進するように」と。

再度、確認しておかなければならない。「帝国主義戦争は帝国主義的政治の継続」とするならば、アメリカ帝国主義がこれまで行なってきた侵略反革命戦争は、以上見てきたように、国際プロレタリアートの団結の解体、国際共産主義運動・国際党派斗争への反革命的介入という帝国主義政治の継続であり、中米会談も、又、その一環であるということである。アメリカ帝国主義は、「平和の時代」を作り出しえないし、よしんば、そのような一時的な「階級斗争の平和均衝」がもたらされたとしても、それは、レーニンが、かつて正しく指摘したように「帝国主義は、独占的権益の確保のためには、平和協定を結ぶこともありうるし、又、すぐ協定破棄して、戦争を起こす」ものであるということである。我々は、中米会談に対する政治態度を明らかにする際に、是非とも、この点を押さえ、中米会談を「第二のジュネーブ会談」として専ら、帝国主義の側から評価し、アメリカ帝国主義の帝国主義的政治を美化し、加担する一切の小ブルジョア平和主義潮流を粉砕しなければならぬ。この小ブル平和主義は、社会共斗を中心とする人民戦線、これに追随する社民左派||反軍国主義派(青解・フロント)これに右翼的に反撥しつつ客観的には補充している反スタ||トロツキー主義諸派、という具合に、諸グループの色合いは異なるが、一つの大きな潮流を形成しつつあり、それは人民戦線運動の一斉拡大へと連らならざるを得ない。我々は、後に、現

その同じ姿勢で、第一に反米武装斗争、人民戦争の破産、第二に、「交渉における斗い」||右翼路線への転換とわめき立て、専ら、自己の小ブル平和主義の本質、武装斗争への敵対という、実際上の反革命性の陰ペイに努めている。革マル派及びこの党派とあって連合戦線を組織し、我が同盟に敵対した、解放派やフロント、又、革マル派の直接的密通者||日向一派、総じて社民左派(反スタ・トロツキー主義)の共通性は、我が同盟と革命的左派が、国際共産主義運動の路線をめぐる国際党派斗争に介入し、その歴史的||世界的地平の断固たる継承の上に、世界単一党建設の一翼へ飛躍しなければならぬその時に、この肝心要の中心問題||革命的左派の独自性たる国際党派斗争の世界党への止揚という問題を欠落させ、一國主義||民族主義に陥り、実践的には、プロレタリア国際主義の「抽象の彼岸」化と国際的||労働者的団結の解体という帝国主義的政治の利害に手を貸している点である。

中国共産党は、従来の、とりわけ「中ソ論争」以来の国際路線を転換したのだろうか？ また、この国際路線はプロレタリア国際主義を「最低限」に於いてさえ、裏切る反革命路線だろうか？ 断じて否である。それは、我々が最近の『戦旗』論文で明らかにしてきたように、先ず何よりも、ソ連社会帝国主義の武装反革命を実践的にバクロし、ベトナム||インドシナ革命戦争統一戦線の根拠地として、全人民の総武装||プロレタリア独裁を強化してきた。

在どういう傾向、いかなる潮流を粉砕しなければならないか、というプロレタリアートの直面する政治的||実践的任務の項で、これらの点を詳細に提起するであろう。

だが、次に、中国共産党の国際路線の評価に立ち入っていく必要があるだろう。

② 中国共産党は「極右路線」に転換したのか、又、その路線は反革命か？

一〇。八以来の革命的左派の大衆的実力斗争と武装斗争に一貫して敵対してきた革マル派は、彼らの機関紙「解放」(八月五日号||二〇五号)で次のように主張している。

危機に瀕した米帝国主義の野望が、露骨に示されているとともに、それに対応するスターリニストの対応の現在の腐敗がうきばりにされている。

それ(ニクソン訪中受諾)は明らかに、六五年十二月文芸整風運動を契機として開始された文化大革命という名の党内||権力斗争の混乱の中で、孤立化を深めた中国の国際的地位とその地歩を築くために破産した反米武力斗争に直結した外交政策をなしくずし的に手直ししつつ、米帝との「交渉における斗い」を導入し始めたことを示している。

革マル派を初めとする多くの日和見主義党派は、「中米会談||新ジュネーブ会談」という帝国主義政治の土俵に自ら腰をすえた中国共産党は、今から八年前の六三年に、「根本的に対立している二つの平和共存政策」という論文の中で、ソ連共産党の「平和共存の総路線」を、「ずばりいえば、彼らの目的は、プロレタリア国際主義を裏切り、帝国主義と結託しているかれら自身のみにくい姿をおいかくそうとするもの」と批判し、「レーニンの提起した平和共存政策は、権力をにぎっているプロレタリアートが、社会制度の異なる国家との関係を処理する面での政策」であるにもかかわらず、ソ連共産党は、「今日の社会問題解決のための最高原則」||「共産主義の戦略的基礎」にまで「高めあげ」たことを主要に批判し、ソ連共産党の国際路線を「三つの原則的な」観点から、「社会帝国主義」と批判した。

この一九六三年のソ連社会帝国主義の反革命的国際路線批判は、中国共産党の国際路線の戦略的基調をほぼ全面的に明らかにしていると思われる、『根本的に対立している二つの平和共存政策』論文の中の、「三つの原則的な意見の相違」とは何か？

それは、中国共産党によれば、第一に、「平和共存の実現を打ちとるために、帝国主義やブルジョア反動派とたたかう必要があるかどうか。平和共存の実現は社会主義と帝国主義との間の対立と斗争をとりぞくことができるかどうか」の問題である。中共は、ソ連社会帝国主義||フルシチョフ一派の反帝||政治斗争の「二つのイデオロギーの間の闘争」への解消を批判し、「平和共存の障害は、これまですべて、帝国主義とブルジョア反動派から

きている」ことをバクロし、帝国主義とブルジョア反動派の美化に反対している。

第二は「中国共産党は更に続けていう」「平和共存は社会主義国家の対外政策の総路線とすることができるとかどうか」という問題について。中共は、レーニンの「先進国の革命家及びすべての被抑圧民族と同盟を結んですべての帝国主義に反対すること、これがプロレタリアートの対外政策である」(レ、全第二五巻)に依拠して、「社会主義国家の対外政策」は、①「他の社会主義国家との関係」②「社会制度の異なる国家との関係」③「被抑圧人民および被抑圧民族との関係」を処理するものでなければならぬ、と明らかにしている。ここで、中共は特に、ソ連共産党の「平和共存」対外政策の総路線は、「実際には社会主義諸国間のプロレタリア国際主義の相互援助・協力の関係を解消し、社会主義の兄弟国を資本主義国と同様にあつかうことを意味する」と批判している。

更に、第三に、「社会主義国家の平和共存政策は、全世界のすべての共産党と国際共産主義運動の総路線となりうるか、どうか。各国人民の革命に取ってかわることができるとかどうか」という問題を挙げて、中国共産党は、この点について、「平和共存は各国人民の革命斗争に取って代わることは絶対にできない。いかなる国も、資本主義から社会主義への移行は自国のプロレタリア革命とプロレタリアート独裁をつうづるはかない」というソ連共

産党中央委員会への「六月十四日付返書」を基に、ソ連共産党の平和共存政策「『世界的な規模で資本主義から社会主義へ移行する全期間の戦略的総路線』は、『各国人民の革命斗争の解消』として批判した。

以上、我々は、中国共産党の「ソ連共産党『社会帝国主義』批判を見てきた訳であるが、要約すれば、中国共産党の国際路線の戦略的基調は、①政治斗争のイデオロギー斗争への「解消」批判「帝国主義国家と『社会主義国家』は相互に許容不可能である」と、②「社会主義国家」の資本主義国家への「解消」批判、③革命斗争とプロレタリア独裁の「平和競争と平和移行」への「解消」批判、である。

中国共産党の「ニクソン訪中受諾」は、かかる中共の国際路線の帰結であり、その延長であること、つまり、「路線転換」等では決してなく、将しく、ソ連派「社会帝国主義」の武装反革命の爆露と宣伝という観点から、当然の如く導き出された「政策」である。我々の中共国際路線に対する態度は、第一に、帝国主義の国際共産主義運動「国際党派斗争への反革命介入」侵略反革命、ソ連社会帝国主義の武装反革命、反スタロッキエ主義諸派の民族主義「一国主義的批判からの断固たる防衛と同時に、第二に、その「ソ連社会帝国主義批判」が、レーニン死後の第三インターナショナル「コミンテルンのスターリン主義的変質と世界プロレタリア独裁の階級的基礎」世界党の解体の総括と実践的克服とい

う観点から成されず、結局のところ、中国共産党は、ソ連共産党「社会帝国主義に対する批判を中途半端にしやらず、徹底的に根本的に党派斗争を遂行していない点の批判である。

我々の基本的態度は、以上のように定めねばならない。この我々の政治的態度は、中共の国際路線を「ソ連社会帝国主義の武装反革命の實踐的暴露」という点で評価しつづ、その批判の中途半端性、国際党派斗争の動揺性の批判を特徴としているのであるが、それは実践的には、次の二点を意味している。つまり、一方では、帝国主義の侵略反革命・社会帝国主義の武装反革命との断固たる武装斗争の遂行による、中国共産党及び被抑圧民族人民の革命斗争の防衛と反スタロッキエ主義諸派の「武装斗争への敵対」――日和見主義の粉砕を任務として自覚すると同時に、他方、①先進国中国派が何故右派として、人民戦線派の政治上の補完物としてしか存在しえなかったのか、及び②中国派左派が、何故、一つの政治潮流として登場しえないのか、つまり、革命的左派と結合しえなかったのか、ということへの批判「党派斗争の遂行、を意味しているのである。

③ 中米会談の現実的意義と革命的左派の分解に、どう対処するか?

さて、中米会談の現実的意義は、一体いかなるところにあるのか、この点の分析に我々は進んでいこう。

第一に、ベトナム・インドシナ人民を中心とする民族解放戦争の維持・拡大による、アメリカ帝国主義に対する追撃戦である。「中国人民は、米帝とその手先に反対するインドシナ三国民と世界各国人民の革命斗争を、断固として支持する」「全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者とその全ての手先をうち破ろう」(七〇年五月二〇日・毛沢東)という中国共産党の路線は、「台湾省からの米軍の撤退」要求という形で、現在も尚、貫徹されている。

第二に、アメリカ帝国主義のベトナム・インドシナ革命戦争への敗北と、これにもたらされた、米帝の政治的「軍事的後退の弥縫策としてのニクソン・ドクトリン」に対して、「日本の軍国主義復活阻止」として表明している点である。沖繩返還「自衛隊配備」をもって、侵略反革命軍事行動への直接的乗り出しを計る、我が日本帝国主義は、深刻なカベにぶつかかり、動揺し始めている。それは、一言で言えば、国内に於ける革命的左派の「侵略反革命戦争粉砕」全人民的武装斗争の拡大という障壁だけでなく、国際的障壁にぶち当たる、という重大な動揺を引き起こしていることである。

第三に、以上の反米民族解放戦争「戦線」日本の軍国主義復活阻止勢力形成路線は、「反ファシズム人民戦線」民主連合政権」を掲げる人民戦線派の拡大と、社民左派「反軍国主義派のこれへの屈服という形をとって、革命的左派「プロレタリア独裁派の政

治的後退と分解をもたらしている。中国共産党の周辺革命路線の矛盾と限界が、一挙的に、この人民戦線派の急進と革命的左派の解体的危機へと煮つまらざるを得ない可能性は、厳として存在している。

中米会談の現実的客観的意義は、ほぼ、以上の三点に要約できるだろう。

革命的左派に結集する、先進的労働者人民は、プロレタリア国際主義を、いかなる潮流、いかなる傾向と斗い抜くことによって、守り、発展させるべきか、これが、我々に問われているのだ。

中米会談に対するプロレタリアートの政治的態度をめぐる潮流或いは、主要な傾向は、次の三傾向、三潮流である。

第一の潮流は、帝国主義の侵略反革命戦争、及び戦争遂行体制警察的・軍事独裁制に対する、専ら、小ブル平和主義的、日和見主義的批判をやり、社共共斗を中心とする人民戦線派、又、革命的左派内部の社民との密通者（「反ファッショ」派の解放派や反軍国主義派のフロント等のグループ）は、この潮流である。

この潮流は、自からの小ブル平和主義の本質、日和見主義の本質を美化するために、中国共産党の「平和共存」政策を、ソ連共産党の「共産主義の戦略的基礎——平和共存の総路線」へ二重写しして理解し、このデマゴギーをもって、帝国主義と「社会帝国主義」の平和共存（革命戦争なき、階級権力関係の均衡）に依拠して、初めて現実的根拠を与えられる、徹頭徹尾、反革命的な「民主連

右翼的反撥を組織しているところにある。しかも悪いことに、専ら、一國主義的眼玉から中米会談を評価しているために、革命的左派の現在の課題、即ち第三インターコムメンテルンのスターリン主義的変質と解体、及び戦後ヤルタジュネーブ体制の再編過程に於ける中ソ論争の意義を、「世界プロレタリア独裁と過渡期世界階級斗争」の観点から総括し、もって、国際党派斗争の革命的一翼へ革命的左派を発展させる、という国際的任務に敵対している。

かかる特徴を背景に、反スターリニストに転落した革マル派は、この潮流の主要な代表党派であり、「中米会談——スターリン主義の墮落反対」という中共の国際路線批判も、人民戦線派と同じ土俵で、専ら、民放解放戦争や帝国主義国における武装斗争への日和見主義的敵対（「革命主義反対」）の陰ペイに利用している。この革マル派に屈服した、反動的な日向一派は、「中国のスターリン主義からの決別の作業を押し進める」（ニセ「センキ」二七三号）等と太言壮語を吐きながら、革マル派と同様に、「人民戦争・反米武力斗争の破産」とわめき散らすことによって、自からの日和見主義の本質（「地区共斗——ソビエト型組織路線」）を陰ペイするのを利用して、ただ、残念なことに、この潮流の中に、革マル派や日向一派とは色合いは異にしながらも、中国共産党の中米会談が、客観的には人民戦線派と「反ファッショ」「反軍国主義」派の大同団結を促進し、革命的左派——

合政権」（国民連合政権や中道民主政権という名目は異なる）の「樹立」のために利用しているのである。

だが、社共共斗を中心とする人民戦線派は、これは、従来からそうであったように、徹頭徹尾、小ブルジョア平和主義、社会排外主義であり、帝国主義的政治の代弁者であった。問題は、革命的左派内部の社民への裏切り者が、許すべからざるを得ない反動的屈服を先進的労働者人民に強制している点である。彼らは、革命的左派の一〇・八羽田斗争以来の「国際主義と実力斗争」の伝統を社民に売り渡し、革命的左派の一〇数年来のレーニン主義を清算し、結局の処は、情勢の急激な展開の際には必らず現われる社民に屈服し、革命的左派を社民の補完物にしようとするところからいのである。このことは、解放派が日向一派をそのかして、我が同盟の現斗団を三里塚から追放しようとする企てたり、或いは、フロント派が「党派の延命」策をブンドの口まねで考えた末に、つまりは「軍国主義反対」——小ブル民主主義派に逃げこんだり、そして、何よりも、この社民左派は、「革共同主義反対」を看板に、我が同盟のかつての戦友——中核派と反革命集団——革マル派を、全く「前後見さかなく」同列に置いて批判しているところに、彼らが、最早、「革命的左派」ではないことが明らかである。

第二の潮流。反スターリン主義諸派である。この潮流の特徴は、人民戦線路線と人民戦線派の「中米会談支持」が、専ら、小ブル平和主義的・小ブル民主主義的にやられていることに対するロ独派の「解体的危機に陥るのではないか」という、全く「善良」な危機意識を、「毛周の平和共存路線への退却——革命」と性急にも表現してしまった人達もいるが、この人達は冷静に事態を見なかつたか、或いは、あらかじめ、人民戦線派や反スタ派との党派斗争を放棄したか、どちらかである。

第三の潮流は、先ず何よりも、帝国主義の侵略反革命・社会帝国主義の武装反革命の粉砕というプロレタリア国際主義の「最低限の任務」を、国際共産主義運動の再編——国際党派斗争によるプロレタリアートの国際的団結の一層の強化という、革命的な観点から、「中米会談」に対する政治的態度を表明している我がブンドを初めとする潮流である。

この潮流は、政治的には少数派であるが、最も原則的に、しかも実践的に中米会談に対する国際主義的態度を堅持している。原則的というのは、中共の国際路線が「ソ連派——社会帝国主義」の武装反革命を実践的にバクロするという観点から、①民族解放戦争拡大——米帝追撃戦の組織化、及び②侵略反革命軍事行動に乗り出した日本帝国主義に対する国際的包圍網の拡大を高く評価し、同時に、ソ連——社会帝国主義の批判の不徹底性と其の根拠（第三インターコムメンテルンのスターリン主義的変質と解体の未総括）の批判という国際党派斗争を組織しなければならないという意味において、実践的というのは、革命的左派の国際党派斗争の一翼への飛躍と試練という歴史的観点から、レーニン主義とプロレタ

リア国際主義を守り、発展させ、①毛沢東派が先進国で多くは「右派」であること、及び、②革命的左派との未結合、政治潮流として登場しえなかつたこと、を批判し、革命的左派の動揺分子（例えば、中核派の諸君）を、人民戦線派、軍国主義反対派、反スタリトロッキエ主義諸派との党派斗争を徹底的に斗い抜く事によって、帝国主義の侵略反革命粉砕、社会帝国主義の武装反革命粉砕を実現する、全人民武装蜂起、臨時革命政権を樹立する闘いを組織する、という意味において。

日本における党派斗争は、ようやくにして、国際党派斗争の一環を担い、しかも革命的左派の歴史的試練・真のプロレタリア国際主義を代表しえる国際的潮流へ飛躍しうる絶好の機会を、今、迎えようとしている。我々は、必ず勝利できる確信をつかみ、共産主義の大勝利へ向けて、プロレタリアートの世界独裁と世界党への大道を、踏み出す歴史的时代へ突入しなければならぬ。全人民は、共産主義者同盟の旗の下に結集し、我が青年同盟と共に進め、

今秋斗争と我々の任務

中米会談に対する評価、特に、中米会談に於ける中国共産党の国際的路線に対する政治的態度は、今秋斗争に於ける我々の任務、戦術として打ち固められねばならない。

つある人民戦線運動をいかに切りくずすか、という問題である。レーニンには、かつて「ブルジョアジーのプロレタリアートに対する二つの斗争方法」として、前近代の・封建的方法として直接的暴力支配、専制支配と、近代の・資本主義的方法として、「プロレタリアートの分裂の組織化」とブルジョアジーの政治的代弁者、日和見主義の育成による階級支配がある、と指摘している。我が、日本帝国主義は、他の列強の帝国主義者がよくやっているように、後者の方法をその基調にしている。それは、「楽して儲ける」ためである。

にもかかわらず、日本帝国主義は、第一の問題に対して、「台湾死守」を決意した。窮地に追い込まれた日本帝国主義は、沖縄問題の帝国主義的解決（「施政権返還」と自衛隊配置）と並んで、「台湾断乎死守」を再三表明し、侵略反革命軍事行動の直接的乗り出しの「生命線」の防衛をなすことによつて、一挙的に快進撃をはかろう、というわけである。これは、「楽して儲ける」というものではなくて、徹底した「反共主義」と一切の人民の抵抗を打ち砕く、侵略反革命戦争遂行体制、警察的・軍事独裁体制の貫徹として外化されざるを得ない。それは、明らかに、又、先ずもって、国内的障壁、革命的左派の侵略反革命軍事行動粉砕、全人民的武装斗争の粉砕として、直接の射呈においている。革命的左派の組織破法による「完全非合法化」と全人民的武装斗争の未然の防止、人民の一切の抵抗の弾圧、「台湾死守」という

① 中米会談と侵略反革命軍事行動に乗り出した日本帝国主義

先に、我々は中共の中米会談、ニクソン訪中受諾の客観的、現実的意義を、①民族解放戦争拡大、米帝の政治的、軍事的後退に対する追撃戦、②アジアの被抑圧民族人民の「日本の軍国主義復活反対」戦線による、侵略反革命軍事行動への直接的乗り出しを計る日本帝国主義に対する国際的包囲網、③人民戦線運動、「反ファッショ」「反軍国主義」の小ブル平和主義、民主主義運動の拡大化と、革命的左派の政治的後退と分解の傾向の増大、として明らかにした。

日本帝国主義の従来国際路線は、国益、国防、自主防衛路線であり、それは、一方ではアメリカ帝国主義の世界戦略の国際的一翼を担い、アジアの民族解放戦争を抑圧する政治的目的で組織された帝国主義軍隊を強化し、総力戦体制、国民皆兵を担い、他方で、帝国主義的労働運動の強化・拡大による、人民戦線運動（小ブル民主主義運動・小ブル平和主義運動）の切り崩しと、革命的左派（とりわけ蜂起戦争派）のセン滅として現われていた。日本帝国主義の直面する問題は、第一に、侵略反革命軍事行動への直接的乗り出しの路線の国際的、国内的障壁をどうぶち破るか、という問題であり、第二に、米帝の政治的、軍事的後退への中共の追撃戦と「軍国主義復活阻止」の波に乗っかり、拡大じつ

決意は、実際的には、かかることを日帝が決意したことを意味しているのだ。

さて、第二の問題に対しては、どうだろうか。もちろん、日本帝国主義の排外主義的労働運動の強化・拡大による人民戦線運動の解体・再編という反動的目的は変わってはいかず、むしろ、排外主義的労働運動の政治運動化さえ狙っている程である。（七二年春をメドにしたIMF・JCを中心とした全国単一労組の結成等）だが、かかる戦略的基準の下に、日帝は当面、侵略反革命軍事行動のむき出しの宣伝や戦争遂行体制、警察的軍事独裁制に対する人民の抵抗。批判を小ブル平和主義、民主主義的に糾合し、ブルジョア支配の「安全弁」たる人民戦線派を利用しようとしているのである。日帝は、佐藤帝国主義政府をして、「日本は軍国主義を復活させていない、平和憲法をもつ国家だ」とか、「政府は中国と会う用意があるが、中国が我々を敵視している」等といわせ、侵略反革命軍事行動の陰謀や警察的軍事独裁を陰ペイし、小ブル平和主義、小ブル民主主義の幻想を宣伝・煽動している。

問題は明らかに変わった。「台湾死守」と「中米会談支持」、「革命的左派セン滅」と「人民戦線派利用」という二つの事柄は、日本帝国主義にとって全く矛盾しないもの、つまり、侵略反革命軍事行動への直接的乗り出しと、その国内体制、警察的軍事独裁体制ということである。

七一年秋は、日本帝国主義にとつても、我々にとつても、「命

がけの飛躍」をかけた攻防戦にならざるを得ない客観的根拠は、以上の通りである。

② 今秋斗争で、革命的人民は何を任務としなければならないか？

今秋斗争に於ける、我が同盟と先進的労働者人民の任務は、次の三点にしばりあげられなければならない。

第一の基本的な任務は、侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義打倒のスローガンを鮮明に掲げ、日帝の侵略反革命戦争遂行体制警察的軍事独裁体制を、全人民的武装斗争で撃砕することである。十一月決戦の敗北以降の、反政府斗争から政府打倒斗争への或る種の過渡期の主体的清算を、今秋斗争に於いて実現しなければならない。侵略反革命軍事行動へ直接的に乗り出した日本帝国主義を打倒する中心環は、警察的。軍事独裁体制を粉砕するか、否かである。

人民戦線派は、今秋国連総会での「中国国連加盟」実現運動を議会で推進することで、裏切りの準備を進めている。

革マル派は、日本共産党に対する「町田虐殺」抗議斗争と大衆カンパニアデモで逃げさる、という逃亡の準備を進めている。

右派連合の諸派はどうか？地域住民運動の拡大に「ソビエト運動の萌芽」という意味を付与することに窮々とし、これまた、十一月決戦敗北以降の階級斗争の過渡的局面の持続の上に、自か

観点から常になされた、ということである。ただし、レーニンとボリシェビキが、プロレタリアートを指導的階級とする全人民武装蜂起に向けて、一貫して、「煽動・宣伝」を強調したことも納得がいくものである。

我々は、党の計画する「意識的」武装斗争を、このレーニン主義の核芯の一つである、「全人民武装蜂起に向けたプロレタリアートの動員と組織化」という全人民的政治斗争の観点の中心におき、スターリン主義、社会民主主義、小ブル民主主義からレーニン主義を守り、発展させる党派斗争と同時に、「侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義打倒」の鮮明なスローガンの下に、官僚的警察的軍事独裁粉砕を獲ちとるべく全力を集中しなければならぬ。

第二の任務は何か。

それは、人民戦線派及びこれに政治的に屈服した社民左派（革マル・右派連合）から、革命的左派を防衛し、革命的左派内部の動揺部分、とりわけ無党派戦闘主義（中核派）やカストロロゲバラ主義の破産を、毛沢東主義で乗り切らんとするグループ（赤軍派）の解体・再編である。つまり、第二の任務は、一言で言えば、蜂起戦争派の維持・拡大であり、思想的にはマルクス・レーニン主義の防衛と発展、政治的には、権力問題の発展を実現する戦いである。

四・二八―六月斗争を経て、二派止揚・八派解体―単一党建設

らの延命を狙う、というコソクな脱落の道を準備している。

中核派を中心とするソビエト派からの離脱組はどうか。中核派は、先進国主義の自己批判運動という旧来の右翼路線と被抑圧人民への「党の解消」を全く総括せずに、専ら戦術左翼主義的に、無党派武斗集団的に、今秋斗争を乗り切ろうとしている。

「全社会的な一〇・八」の実現をスローガンに空文句を豪語し、「肉弾の思想」の復活が、それを物語っている。中核派は、無党派戦闘主義的な今秋斗争ののりきりをやることによって、結局は、プロレタリア革命党の被抑圧人民への「解消」から、敗北の道を準備している。

日本帝国主義打倒の環を、従って、全人民的政治斗争の中心環を、官僚的警察的軍事独裁粉砕に設定して、我々が今秋斗争を総力戦で斗い抜くことは、以上の様な諸潮流、諸党派のスターリン主義、社会民主主義、小ブル民主主義からレーニン主義を發展させることを同時に意味している。我々は、レーニン主義の核芯の一つ、全人民的政治斗争に対するレーニンの態度を復権させなければならぬ。つまり、全人民的政治斗争とは「レーニンが正しく指摘しているように」ブルジョアジーによって武装解除されたプロレタリアートが、全人民武装蜂起へ向けて、諸階級・諸階層人民を組織し、動員していく階級斗争であり、レーニン主義の党派性は、「国家をめぐる諸階級・諸階層の分解」を全人民武装蜂起へ「組織し、動員する」点であり、全面的政治バクローは、この

めざす、革命的左派―蜂起戦争派の斗いは、新しい段階に、つまり、我が同盟の、「資本主義批判」反スタ。マルクス主義止揚」による反スタ―トロツキー主義諸派のイデオロギー的解体（武装斗争の政治的質の小ブルジョア性の解体）という段階から、政治的実践的解体の段階に突入し始めたことを自覚し、この斗いを更に発展させなければならない。

我々は、この点で、今年の六月―七月に進行した革命的左派（二派―八派）の分解の自然成長性と、その根拠たる、共産同とこれに結集する我が青年同盟や反帝戦線の「党派斗争の手工業性」を総括しておかねばならない。

六月―七月に進行した革命的左派の分解の特徴は、第一に、八派共闘の二分解であり、ソビエト派の社民左派への「純化」と、中核派―四トロ連合の戦術左翼的な「ソビエト派」からの離脱である。ソビエト派右派連合は、その共通の党派性を「革共同主義反対」の美名に隠れた反レーニン主義と「帝国主義的経済主義」に置き、革命的左派からの脱落―社民宣言を発している。この潮流は、かつては革マル派と連合戦線を形成してB―B連合に敵対し、今は、蜂起戦争派と中核派に敵対している、或る意味では「終始一貫した」右派であった。この右派連合は、日に日に、先進的労働者人民から遊離している根拠もそこにある。他方、中核派は、「ソビエト派からの離脱」という点で一定の評価はしえるが、「先進国主義の自己批判運動」が、「被抑圧人民への党派の

解消」へ結集した根拠を総括しえず、この党派性の解体の延長線上に「大衆実力斗争の復権」という戦術転換を試みたものの、やはり、人民戦線派に政治的に屈服している。

我々の「党派斗争の手工業性」は、この八派共闘の分解を、以上のように中途半端なものにしてしまったのである。

第二の特徴は、二派の再編と、旧共産主義者同盟の代表的流派である赤軍派の日共革命左派神奈川委への解体・屈服である。

旧共産主義者同盟の党派性であった、「反帝第三潮流」論、つまり、カストロ||ゲバラ主義に依拠して、国境をこえる革命||大陸革命戦争の拡大の直接延長線上に、「民族解放戦争の戦略的統合ヘゲモニー||世界党建設」を掲げる路線は、この赤軍派の日共神奈川委への屈服によって、最後の破産を宣告された。「ブンド党内論争は武装斗争の仇花」等と我々を批判し、馬鹿にしていた赤軍派は、結局は、中国共産党と日共革命左派に政治的に解体され、偉大な武装斗争の実践にもかかわらず、一つの「戦斗グループ」にまで後退したのである。だが、問題は重大である。日共革命左派神奈川県委は、「反米愛国路線の勝利」を宣伝し、「蜂起戦争派の反米愛国戦線への再編」(解放の旗一九九号)を路線化、している点である。問題の鍵は、日本共産党の「五一年綱領」の根本的批判と、この「綱領」に代わる「世界プロ独の綱領問題」を展覧させることであるが、我々は今、即答の用意と余裕をもち合わせていない。だが、中共の中米会談における態度の評価の中で明

始めとする被抑圧人民を、プロレタリア国際主義で徹底的に組織し、動員することに全力を傾注しなければならない。

「日米帝国主義の侵略反革命前線基地||沖縄を武装斗争の岩へ||」||「日帝の侵略反革命の発射台||三里塚を武装斗争の岩へ」という我々のスローガンを系統的に宣伝。煽動し、一切の抑圧された人民の抵抗の根本が、日本帝国主義の侵略反革命軍事行動への乗り出しとその遂行体制への権力再編||警察的軍事独裁体制にあることを明らかにし、一切の革命戦線を武装斗争の根拠地へ再編していくことが、アジア諸国の被抑圧民族人民の民族解放戦争との現実的結合環たりうることを鮮明にし、プロレタリア国際主義の革命的精神を教育しなければならない。

三里塚の戦斗的農民は、①抵抗から反撃へ ②実力斗争の堅持を基本方針に、政府||公団の警察機動隊の農民に対する残虐きわまりない暴圧に対して、断々乎として、地下壕戦||大衆の実力斗争を打ち抜き、七・一五地裁決定||一六地点の反革命の本質を全国の人民にバクロし、第二次強制収容阻止への並々ならぬ決意を表明した。反帝戦線と我が同盟の影響下にある労働者人民は、プロレタリア国際主義の下、「三里塚を武装斗争の岩へ」のスローガンで、三里塚斗争の方向性を示した。今、三里塚農民は、我々の現斗団を本物の革命戦士へ鍛えるべく経験を教えよと、同時に現斗団に彼らが学び、三里塚斗争の方向性と勝利の核をつかもうとしている。

らかにしたように、日共革命左派の誤りは、本来戦略的に結合されるべきでない、「反米」路線と「愛国」路線を無媒介に結合させ、しかも、それを「戦略的路線」にまで高めあげた結果、プロレタリア国際主義を「最低限」にまで高めあげた結果、正しく適用していかないところにある。もとより、我々は武装斗争に対する日和見主義の本質||小ブル平和主義を隠すために赤軍派||日共革命左派連合を批判する、一切の日和見主義者には、断固たる鉄槌を加えるだろう。国際党派斗争の主翼へ革命的左派を発展させ、中国共産党との正しい党派斗争を組織することによって、旧共産主義者同盟の一切の流派や「反帝第三潮流」の解体・再編を押し進める、という観点から、我々は革命的批判を二派連合に対して行なわなければならない。

今秋斗争に於ける、我がブンドと蜂起戦争派の歴史的試練は、我々が「党派斗争の手工業性」を自己批判的に教訓化し、二派止揚。八派解体再編の新しい段階へ、政治的||実践的段階へ突き進みうるか、否か、この点にある。この第二の任務は、極めて困難かつ至難の斗いであるが、同志諸君と自覚した労働者人民は、是非ともやり抜かねばならない。

最後に、第三の任務。

六九年一月決戦の敗北以降、階級斗争の最前線を強制され、困難な戦いと分解を強いられたが、一〇・八以来の革命的左派の戦斗的伝統を継承している沖縄人民・三里塚||北富士農民を

沖縄の労働者人民はどうか。

沖縄人民は、我が同盟の影響力は皆無であるにもかかわらず、

「本土」における我々の政治主張と全人民的政治バクロ、そしてRGや反帝戦線の斗争方法をみて、実践的に、「日米帝国主義の侵略反革命前線基地||沖縄」を何が何でも、アジアの被抑圧民族人民の民族解放戦争との現実的結合環へ転化させていこうとする革命的な斗いが起こりつつある。それは、侵略反革命軍事行動に乗り出した日本帝国主義の沖縄||返還||策動の本質が、「台湾死守」と同じように、直接的な侵略反革命軍隊||自衛隊の海外派兵の拠点としてあることを日増しにバクロされ、排外主義的労働運動、人民戦線派、革命的左翼への政治的分解を急激にもたらしている。「返還協定」粉砕のスローガンを掲げ、全軍労働者人民を先頭とする沖縄人民は、かかる政治的分解の自然成長的過程の中で、「本土」の革命的左翼と連帯して、「返還協定」今秋批准阻止へと斗い抜かんとする革命的左翼へ近づきつつある。

レーニンとは、全面的政治バクロを「国家と諸階級・諸階級の關係」のバクロとして把握していたが、それは、労働者階級こそ国民諸階級・諸階級の小ブル的個別利害にとらわれない全人民的利益を代表できる唯一の階級であること、「民主主義斗争の前衛」であることを明らかにし、かかる全人民的政治斗争の指導的階級として労働者階級を教育し、訓練し、能力を付けていくことを実践的任務としていたからである。

批判「過渡期世界論」日向

我が反帝戦線は、このレーニン主義で徹底的に武装されねばならない。「被抑圧人民への党の解消」を「党派性」にした中核派は、沖繩―三里塚を始めとする被抑圧人民の政治的分解を指導できず、これに拜跪し、溶解し、つまりは、レーニン主義を放棄し、プロレタリア国際主義を守ることができないでいる。「無党派戦闘主義」―中核派の小ブルジョア性は、破産と敗北の道を準備しているのだ。右派連合の諸グループは、これはレーニン主義からの「脱落」などではなく、反レーニン主義、「帝国主義的経済主義」であり、反動的である。

プロレタリア国際主義の旗の下、沖繩―三里塚を武装斗争の根拠地へ飛躍させ、全人民武装蜂起へ人民の総動員をかちとれ！
二派止揚―八派解体の党派斗争を斗い抜き、全国単一非合法党建設を着手せよ！
武装斗争に敵対する日向一派を粉碎せよ！
九月三里塚決戦―一〇月沖繩「返還協定」実力粉碎斗争へ総力戦体制を打ち固めよ！

全ての同志諸君！

以上の三大任務を、完全に実現しよう。今秋総力戦体制を、全国一地区で早急にとりきり、戦闘配置につかねばならない。

侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義と対決し、警察的軍事独裁体制を全人民的武装斗争で撃破せよ！

人民戦線派、社民左派、反スタ派の一切の小ブル平和主義―小ブル民主主義を粉碎し、マルクス・レーニン主義を維持し、蜂起戦争派を打ち固め、革命的左派を発展させよ！

はじめに

六九年四・二八沖繩斗争の敗北の総括をめぐって開始されたブント内党内斗争は、赤軍派の党内斗争からの脱落以降も、「党の蜂起」としての武装蜂起を準備し、実現する「党」への飛躍として、学生「党」から真の革命党への脱皮として、「党の革命」を実現していった。そしてそれは同時に、秋以降の恒常的武装斗争（R・G、地区Y、地区軍団の建設と活動）の過程で、日和見主義が、解党主義、大衆運動主義、軍事反対派として、さまざまブルジョア・イデオロギイを党内に流入させつつ登場して来る過程でもあった。党の武装、党の蜂起それ自体を否定していった情況。階級斗争を共同体の自己変遷史として整理し、新たな共同体の創出をもつて革命を考え（観念論！）、党の任務をそのような共同体（現在のには、砂川、三里塚）を美化していくこと、宣伝していくことに矮小化させることにより、大衆反乱一般をもつて蜂起に代行させ、結局党の武装に敵対していった叛旗派。そして、革マル理論に体系的に屈服し、自己のフラクの発生史的端緒―六九年秋の敵前逃亡を合理化させるため、第二次ブントの国際主義を否定し、実践を全否定し、ついでに党の非合法、非公然部門の解体を要求した解党主義集団日向一派、党を反帝戦線、叛軍行動委員会の指導部に解消し、党の武装を旗ザオ突撃隊にまで低めた軍事反対派、日向一派。我々は、このような一切の日和見主義集団を党内から放逐することを通じ、赤軍派との党内分派斗争の過程から、秋期恒常的武装斗争の過程

で蓄積してきた革命党の質を断固として守り抜き、継承発展させてきた。それは蜂起を組織する単一非法党に体系的非法法党的建設、蜂起に向けた計画としての戦術であり、スターリン主義、紛砕、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義の復権であり、徹底した国際主義による日本プロレタリアートの系統的、政治的教育である。

七一年四・二八清水谷三派（反帝戦線・革命戦線・京浜安保共闘）統一集会は、二派一八派として権力に分断され、一方は「ゲリラから党をつくる」路線の中で、権力の實質的組織破防法の攻撃に対抗できず、また一方は不断に権力の壁の前に屈服し、人民戦線左派へ純化せんとしている現在の日本階級斗争総体の混迷を、体系的非法法党一蜂起・世界革命斗争一世界単一プロ独の観点から二派の防衛・止揚、八派政治の解体、単一党の下への人民の再編として、明確な第一歩を踏み出したものである。

まさに日本階級斗争は、後進国武装解放斗争と帝国主義の侵略反革命戦争という世界階級情勢の中で、侵略反革命前線基地・沖縄をめぐり煮つくりを見せられており、一方では、農民斗争の再開、在日朝鮮人民、中国人民の日本階級斗争への再登場、部落民の斗争等々といつた形で、従来の新左翼諸潮流がかかりきれなかつた階級の斗争を含めて前進している。このような中で、六〇年代後半の急進市民主義運動的な党の指導の質でははや決定的に不十分であり、蜂起を組織し、政府問題に答えざる、過渡期世界に

は、あまりにも明らかであり、ましてや、帝国主義的経済主義者、青解、フロント弱者連合にありうべくもなく、唯一我共産主義者同盟のみ課せられているのだということ断固として確認しようではないか。

まさに我同盟の前進に対し、直接的敵対をもつてしか延命できない日向一派を、我々の政治的、イデオロギイ的、組織的攻勢の中で、完膚なきまで粉砕しつつ、体系的非法法党建設一二派止揚・八派解体の大道を断固として前進していかうではないか。

ここに、総ての同志、兄弟諸兄に日向「過渡期世界論」批判を送る。おまかな構成は、まず日向過渡期世界論がフロントの国際主義の立場を否定したものでしかないことを確認し、同時にそれが戦略主義的偏向の中で「論」として完結したもの、戦略構築の「新たな基準」に矮小化されていることを批判する。次に、過渡期世界論を「新たな基準」として科学的(?)に提起するために、日向が考えだした方法論の批判をしていく。次に、過渡期世界論の内容を「二つのガイスト」としていることの中に、日向の革命観をみていき、その批判を若干述べたい。そして最後に、「新たな基準」そのものの無内容性、反革命性を暴いていきたい。

第一章 国際主義からの脱落、過渡期世界論の

日向式換骨奪胎

何故我々は過渡期世界論を問題にしなければならないのか？そ

おけるボルンエビキ党に体系的非法法党、革命的マルクス・レーニン主義の復権が実践的に問われ始めているのである。

まさしく四・二八三派統一行動は、八派政治のイデオロギイ的破産、政治的破産をつきだすことにより、本格的な権力斗争を担っていく部隊はいつたどの党派なのかを、全人民の前に明らかにしていった。そして、この四・二八斗争は、蜂起戦争派内部の再編を進める以上に、八派共闘の再編を不可避のものとしていった。それは端的にいって、表面的には沖縄斗争方針をめぐった中核派と青解・フロント弱者連合への八派共闘の分裂として進行していった。我同盟を中軸とした蜂起戦争派の前進と、革マルの社民への食込み（沖縄薩大の内ゲバをきっかけとした革マル、日共の全国的内ゲバを見よ）に挾撃された中核は、我同盟を中軸とした蜂起戦争派に対する政治主義的敵対を一方でなしつつ、八派内中間主義諸派に対する一元的支配を一方で進めようとしている。

五・一九から五・三〇における八派再編はこのことを示している。しかし、六・一七において明らかになつた八派政治の崩壊は、崩壊そのものは必然だつたとはいえ、中核（四トロ）対青解、フロント弱者連合といつた形で中核が解体が進行しきらなかつた限界を、我々は四・二八日比谷公園における日向一派解体の最終段階である大衆ゲバルト戦での敗北の結果としておさえておかなければならない。だが同時に、八派の革命的解体再編は、最終的に黒寛にしか依拠できない中核派の手にゆだねられているのではないこと

れは、なによりも過渡期世界論こそが、過渡期世界における国際主義の内実を明らかにせんとしてきた、いわばフロントの国際主義の立場の解明としてあつたからである。一向過渡期世界論は、多くの欠陥を持つていたとはいえ、マル戦派との党内斗争を通じて、一国主義、経済主義を克服し、世界党一世界赤軍一世界反帝統一戦線の指定、世界同時革命の提起をなし、三プロック階級斗争の結合一第三の道派として日本階級斗争を世界階級斗争の中で位置づけようとしたのである。我々は一貫して、一向過渡期世界論の総括・発展として、我々の国際主義の内実を深めてきた。

日向過渡期世界論は、一向過渡期世界論に対する革マルからの「時間的同時（革命）か、論理的同時か」なるスコラ論議に屈服することを通し、一向過渡期世界論を右翼的に総括し（理戦八号）「二つのガイスト論」「世界一国同時革命」なる「概念」を發明し、過渡期世界論の換骨奪胎をはかつていくのである。日向派は過渡期世界論を、過渡期世界の世界史的立場にすりかえ、あとは「二つのガイスト」論、「現実世界の単純反映」一「新たな基準」として「基準」にもならぬ抽象をふりまわすだけに終つていく。我々は、日向が過渡期世界論を戦略構築の「新たな基準」に矮小化したことの批判をまず行なわなくてはならないだろう。

「われわれが過渡期世界論という時、世界一国同時革命戦略論との関連で、現代世界の世界史的立場を二国プロ独から世界プロ独樹立への過渡として明きらかにすると同時に、そのような過渡

期世界の現状分析の対象化の内容を含めてそう呼ぶのである。」(ニセイズム14号P26)「その際、現状分析の世界対象化がきわめて困難であり、その領域における諸党派間の論争の止揚こそが問われている」とし「宇野経済学方法論の批判的摂取を含めて、方法論上の諸反省」が問われてきた、とするのである。

ここに日向派の過渡期世界論の換骨奪胎ぶりが簡潔にまとめてある。まとめてみれば④過渡期世界における階級関係ローシア革命以降の国際階級斗争の混乱、コミンテルン崩壊、その結果として三プロック階級斗争の構造を総括するのではなく、過渡期世界の成立を所与のものとして固定し、過渡期世界論を「論」として完結させようとしたこと。⑤国際階級斗争(或いは日本階級斗争)の混乱を「現状分析的世界対象化がきわめて困難」なこととして総括し現状分析をもつて過渡期世界論に代えたこと。⑥現状分析を正しく行なうため(「戦略の科学性?」、宇野経済学方法論の「批判的摂取」を行なったこと。

まず我々は、日向が過渡期世界を国際階級斗争の歴史の中で成立したものとして把握、過渡期世界の止揚の方向を、国際階級斗争の総括、とりわけレーニンと第二・第三インターの総括の中から明らかにしようとするのではなく、過渡期世界の成立を所与のものとして前提してしまい、過渡期世界を「論」として科学的に把握できると思いついておられることの中に、国際主義からの脱落を見てとらなければならぬ。

なぜなら、過渡期世界の構造とは、過渡期世界における階級斗争の構造のことであり、三プロック階級斗争のことなのである。まさに過渡期世界論とは、一方では、現在の国際階級斗争の把握の問題であり、また一方では国際階級斗争総括の地平の問題であり、決して、静的な経済構造の分析一般ではないのだ。

まさしく、過渡期世界の階級斗争の構造(三プロック階級斗争)は、コミンテルン指導下の世界革命の破産の結果として確認しておかなければならない。すなわち、先進国においては、スターリニスト、トロツキスト、ローザ主義者等といった「党」が並存し、後進国においては、コミンテルン指導から離れ、独自の革命路線をもつて中国革命を成功に導いた中国共産党の影響下に、第二次大戦以降も、民族解放斗争として革命戦争が永続しており、逆にその民族解放戦争と帝国主義の侵略反革命戦争の緊張関係の中で、中南米にOLAS路線を、また先進国に新たな潮流を生み出している。そして又「労働者国家」内部では、党が更なる階級斗争の前進に向けプロ独を組織し、指導することを放棄しているため(スタ・プハ綱領は、一時的退却としてのネツプを合理化・美化し、それを固定化している)党は政府に、世界革命は対外交に、革命は生産力向上運動に矮小化され、階級斗争が反政府斗争としておきてきている。

このような過渡期世界の階級斗争の構造を総括し、国際共産主義運動の分裂を止揚して、我々は世界党「世界赤軍建設、世界革

命戦争「世界単一プロ独を樹立せねばならぬ」。

過渡期世界を止揚する基軸は、レーニン主義の限界の止揚として存在する。第二インターとの党派斗争をレーニンは貫徹しきれず、帝国主義戦争の過程で第二インターが崩壊し、一方ロシア革命の成功をふまえて、第三インター(コミンテルン)を形成するわけであるが、レーニンはコミンテルン内部に第二インターの政治理論、組織論、イデオロギイの流入を許してしまつたのであり、同時にロシア共産党内斗争における権力問題に対するあいまいさ故、レーニン主義はスターリンに敗北していくのである。まさに、このようなレーニン主義の限界を克服し、更に発展させる中から、スターリン主義、トロツキズム、ローザ主義の解体を促進するものでなければならぬ。また、毛沢東主義に関していえば、毛沢東自身、コミンテルンの指導を事実上拒否し、中国革命を成功させつつも、コミンテルンとの党派斗争を回避してきたことが中ソ論争、中国文革として、再度の国際的党派斗争、党の改組を問題にせざるをえない事態を結果したのであり、その限界は先進国毛派の無規定な路線(極左から極右まで)として現象しているだろう。まさに過渡期世界の止揚は、レーニン主義の継承発展、世界党「世界赤軍の建設にかかつているのであり、我々は、この間、スターリン主義、反スタ「マルクス主義」の解体、革命的マルクス・レーニン主義の復権、体系的非法党「過渡期世界におけるボルシエビキ党の建設として、ささやかな、しかしながら確

固とした第一歩を踏みだしたことを、断固として確認しようではないか。

さて日向派は、過渡期世界の成立を所与のものとして前提し、過渡期世界を「論」として静的な悟性的解釈に陥し込めることを通じ、国際主義から脱落していくのである。それは同時にプロト主義からの脱落であり、反スタ「マルクス主義」への屈服としてあつたのである。日向派は、過渡期世界の止揚の足がかりを、反スタ「マルクス主義」の地平に屈服することを通して見失い、その党派性を現状分析の科学性に求め、過渡期世界論「新たな基準」として提出するのである。次に、そのような発想、戦略論主義の批判をおこなうてはならぬ。

日向は過渡期世界の階級斗争の混乱を現状分析の困難、戦略のブレとして扱っている。「その際、現状分析的世界対象化がきわめて困難であり、その領域における諸党派間の論争の止揚こそが問われている」(ニセイズム14号P26)そして過渡期世界論をレーニン「帝国主義論」に代る「新たな基準」として提起しているのである。「新たな基準」の内容の批判は、後になされるであろう。過渡期世界の階級斗争の混乱を戦略のブレ一般で説明するところが国際主義からの脱落であることはすでに説明した。さて、問題は過渡期世界論をレーニン「帝国主義論」に代る、戦略構築の「新たな基準」として提起していることの意味である。日向派はこのように言うことによつて、実はレーニン「帝国主義論」を

「帝国主義戦争を内乱へ」という一面でのみ理解していることを暴露しているのである。『帝国主義論』は、一般的に「二十世紀はじめの、すなわち最初の帝国主義的世界戦争の前後の資本主義世界経済の概観図」(レーニン帝国主義論)に終るものではない。第一に「一九一四—一九一八年の戦争は両方の側からして帝国主義的な戦争であり、世界の分割のための、植民地と金融資本の『勢力範囲』の分割と再分割、等々のための戦争」であつた事が証明され、同時に「生産手段の私的所有が存在するかぎり、そういう経済的基礎のうえでは、帝国主義戦争が絶対に避けられないこと」を示している。第二に、戦争を契機として、世界的な革命的危機が成長していること、同時に階級内部に、日和見主義、ブルジョア平和主義、排外主義潮流が広まつており、それらとの斗争が不可避のものとなつていくこと。第三にこの「労働運動全体の国際的分裂」の「経済的基礎」を、「資本主義の最高の歴史的段階すなわち帝国主義に特有な、資本主義の寄生性と腐朽にある」ことを明らかにしたことである。総じてプロレタリア階級からする帝国主義の批判として、革命の現実性の解明として書かれていたのだということを確認しなくてはならない。日向は、このようなレーニン『帝国主義論』の地平を、単なる『資本主義世界経済の概観図』に一面化してしまふことを通して、「帝国主義批判」の見地を否定してしまふのである。

日向派は、レーニン『帝国主義論』を「帝国主義戦争の必然性」

「一般で理解し、それを「基準」として「帝国主義戦争を内乱へ」の戦略をたてることのできたが、過渡期世界においては「労働者国家」が存在しており、「統一市場防衛」が資本主義生存の必要条件だから、レーニン『帝国主義論』は「基準」になりえない。「新たな規準」が必要だ、と言つているのである。このようにして提出された日向「現代過渡期世界論」は、必然的にマルクス・レーニン主義の修正へ進み、政治的には、「労働者国家に対する共同反革命」||「統一市場防衛」などという「死んだ抽象」をふりまわすことにより「現存する諸矛盾の根底から人々の注意をそらす」反動的イデオロギーとして、まさにカウッキ主義として登場するのである。

「現代過渡期世界論」は、まさにこのような日和見主義、排外主義の根柢を、国際階級斗争の現段階の中で、その社会的性格、階級的な性格、その物質的根柢を明らかにするものとして、そして同時にその中で、党・権力・階級の視点の中で敵と味方を厳密に区別し、世界革命戦争||単一世界プロレタリア独樹立に向けた、国際主義の内容を明確にすること、つまりレーニンが奴隷の言葉でしか語れなかつた「帝国主義の批判」||「社会の種々の階級がそれぞれ一般的イデオロギーとの関連において帝国主義の政策にたいしてとる態度」を、過渡期世界の階級斗争の現実の中で、革命を志向するプロレタリアの言葉で「批判」を再度なすべきものである。

我々がこの間明らかにしてきた資本主義の原則的批判||「一タ綱領批判」の地平の復権、反スタ「マルクス主義」批判、そして過渡期世界における階級斗争の総括||コミンテルン総括、レーニン主義の継承発展は、まさに「現代過渡期世界」批判の基礎作業であつたのであり、過渡期世界における党派斗争の地平を、世界党||世界赤軍建設、世界革命戦争||世界単一プロレタリア独として措置し、同時に、現在の国際主義の最低の任務を、後進国武装解放斗争に対する帝国主義、社会帝国主義の反革命軍事体系解体として明らかにしてきたのである。

我々は更に進まなければならない。そして、日向派、青解、フロント等、世界の悟性主義的解釈に党派性を誇つていふ(?)弱者連合、帝国主義的経済主義者どもを徹底的に解体しつくさなければならぬ。

日向の「過渡期世界論」||「新たな規準」そのものの批判は、最後になされるであろう。日向のこの「新たな規準」||科学的「戦略」は、実はレーニン主義と無縁のシロモノでしかなく、科学的であるが、我々は次に、日向の科学的「戦略」(?)をささえる、科学的「新たな規準」、更にその科学的「規準」を保障してゐる(と日向は思いこんでいるのだが、その)「方法論」の批判へ進まなければならない。

第二章 日向方法論批判

日向は「対象把握の領域においてより普遍なるものたるん」(理戦九号)と欲し、方法論の解明に向つた。そして、それは、彼の革命論の中で、極めて重要な位置をしめていふものであることは、次の一節を見れば理解されよう。「我々の革命論をイデオロギーの領域から科学の領域へと、出来得る限り接近させること。その端緒を過渡期世界論の歴史的位置と論理的構造の解明として、まさに何人も認めざるをえない方法論体系のうちに包摂する」(理戦九号)「現状分析的世界対象化がきわめて困難であり、その領域における諸党派間の論争の止揚こそが問われている……その為には、宇宙経済学方法論の批判的摂取をも含めて、方法論上の諸反省が……問われてきた」(ニセイズム14号)

すなわち、日向革命論の党派性は、すべて方法論に存在しているのである。そのことは、理戦八号、九号と、日向論文が革命論方法論の解明に多く費されていふことをみてもわかる。

さて、以上のように日向方法論の革命的意義(?)を確認した上で、その批判に入りたい。批判はおおよそ、三つに分かれるであろう。第一に何故日向が方法論を出してきたのか、その党内における意味の確認、第二に、方法論批判、第三に、方法論の自己破産の確認として。

(1) 日向革命論方法論の形成は、フロント党内分派斗争と無

関係ではない。日向は第二次ブントを、「関西ブントのことであり、政治過程論と三期論、そして一向過渡期世界論をその理論上のガイストとする」(理戦九号P12)「いわゆるブント(第一次ブント)とは、ほんとうに全く縁もゆかりもない、まさにそれ独自の戦術左翼集団だつた」(P14)として、ブント十年、とりわけ六七年十・八以降のブントの実践を全否定、清算してしまふことを通し、第一次ブントへ単純先祖帰りをはかろうとしたのだ。(むろん日向は、そのように言うことを通して、六九年十・十一月、とくに十一月佐藤訪米実力阻止斗争からの戦線逃亡集団、日向ブランクの合理化をはかつているのだが。)日向のこのような発想は、マルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもないことを確認しなければならぬ。まず日向は、第二次ブントへ関西ブント独自の戦術左翼集団と規定し切り捨てることにより、「歴史のしつぽを全て捨象」してしまふ、レーニンの「歴史発展の弁証法」を否定してしまふのである。そしてまた、日向の第一次ブントへの単純帰帰理論の継承を復活させるという発想は、歴史を逆転させるという反動的企図であるばかりでなく、理念で現実を把握するという、観念的転倒にならざるをえないのである。

日向は、第二次ブントの清算のうえにたつて「第一次ブントの問題意識」、宇野経済学、主体性論争のとりこみを開始するわけである。しかし実は、「第一次ブント」にはなく、第一次ブント分解に一役買った、黒寛理論への回帰でしかなかったのである。

形式一般をのみ含む純粹概念(II先験的論理学)というカントの認識における「先験的原理論」にまで、一切の躊躇を捨てて突き進むのである。」「(『共産主義』14号P66)

日向のように、カントまで回帰して方法的にマルクス主義を基礎づけようとしたのは、日向がはじめてではない。すでに第二インターの中の日和見主義者、新カント派が試みている。日向は、新カント派にまで先祖帰りにすることによつて、まさに自らの革命論を「何人も認めざるをえないブルジョア・イデオロギーのうち」に包摂したのである。

(3) 日向のこのような思いつきの方法論が、自己破産をまねかれるはずがない。詳しくは、次の「二つのガイスト論」批判で展開するが、日向は「労働者国家」群をお得意の「論理性」「歴史性」「空間性」で解明できず、四苦八苦しているのである。

第三章 「二つのガイスト」論の破産

日向過渡期世界論が、ブントの国際主義の内容をささえてきた過渡期世界論とは、何ら関係のない、黒寛体系への屈服の所産としてあったことはすでに述べた。日向が黒寛へ屈服していったことの証左は、たとえ現代過渡期世界論を単なる情勢分析に小化し、問題をほかそうとしても、厳として「二つのガイスト」論に残存している。日向は、もっともこの「二つのガイスト」論すら

黒寛の自覚の論理にのつとつた、三段階論を、単なる対象認識のための方法論として、日向方法論が形成されてくるのである。八号論文では革命論方法論として、革命論それ自体の三段階論(マルクス革命論・レーニン革命論・我々のそれ)としても方法論が提起されたが、九号・十号で、単なる対象認識の方法論・宇野経済学方法論の独自のとりこみ、として整理されてくる。

(2) さて日向は、ドンキホーテよろしく「我々の革命論をイデオロギーの領域から科学の領域へと、出来得る限り接近させること。その端緒を過渡期世界論の歴史的位置と論理的構造の解明として、まさに何人も認めざるをえない方法論体系のうちに包摂する」(俾点筆者)と大みえをきつたまでは、まだよかつた。

(むろん、ここにおいてもすでに誤まつているわけであるが。)しかし、その方法論を「対象的世界の認識を思惟にとつての形式として自由に再構成しようとした場合、結局論理性と歴史性と空間性という三つのフアクター(ないしはその連関)から世界を表現する以外、他のいかなる方法も我々は持ちあわせていない」(理戦九号P二八)として、宇野経済学方法論を「論理性」「歴史性(時間性)」「空間性」と読み込むことによつて、日向はカント主義の地平まで後退していくのである。「かくして日向君は、一たび認識論の次元で問題を立てるや否や、マルクスのもつとも本質的な規定(歴史性・社会的實在)から、ヘーゲルの概念的把握の論理Vをも跳びこえ、純粹直観としての時間、空間、思惟

最近口にしなくなつていくわけだが。我々は、「二つのガイスト」論の自己破産をつき出す中から、更に何故そうなるのかを、日向の革命観批判を行つていきたい。

「その核心的内容(筆者註)『新たな規準』としての過渡期世界論」は①「労働者国家」群の成立そのものが『帝国主義論』一つで現状分析的に世界対象化をなさない時代の到来にほかならないことを確認した」(ニセイム14号P27)。これがかつては、過渡期世界論の「二つのガイスト」を構成した「現代過渡期社会論」のなれのはてである。「現代過渡期社会論」は、過渡期社会論の「論理的」「歴史的」「空間的」分析としてではなく、レーニン「帝国主義論」では「労働者国家」の分析はできない、などという、まったく常識的なことの確認に終つてゐる。すなわち「現代過渡期社会論」は、その名称だけあつて、具体的内容は一切なくなつたのである。もっとも、理戦八号段階から、ほとんど内容はなかつたのであるが、しかし日向は、理戦八号の中で、ほんのちよびりその内容を明きらかにしている。

理戦八号の中に、黒寛の武谷三段階論の導入による宇野理論の改作の無理を述べた部分がある。問題はその次の個所である。「というのはこれ等の擬制的労働者国家群内部の経済構造は、資本家的商品経済理論の直接的な延長に指定できるものではなく、まさに新たに発生した非資本主義社会の特殊な経済原則の解明として、資本家的商品経済理論とは相対的に独自に論理化されてい

かねばならない宿命を担っているからである。」(P 11、傍点筆者)この展開が、黒寛体系では「ロシア革命以後様々な疎外形態を伴いながら登場した「非資本主義国家群」II「疎外された過渡期社会」内部の政治経済構造の分析をなされたい」として批判した、その根拠として述べた部分であるから、まちがいはなく「疎外された過渡期社会」II「現代過渡期社会」の分析視角として「新たに発生した非資本主義社会の特殊な経済原則の解明」を提起したものである。日向が「経済原則」「経済法則」を宇野に依拠しつつ、「経済原則(筆者註)生活諸手段の生産に関する社会的総労働の配分法則I理戦九号)を商品経済をもつて表現している経済原則の資本制的な現実形態II経済法則」(理戦九号P 61)として理解していることをふまえれば、「新たに発生した非資本主義社会の特殊な経済原則」とは、さしずめ「経済原則の労働者国家的現実形態」II「スターリニスト経済原則」、或いは「日向式経済原則」にしかならないのは明らかである。これでは、結局、スターリニスト美化論か、あるべき「日向式経済原則」からする労働者国家内政治経済法則批判にしかならず、反スタ主義者革マル批判のつもりが、スタか革マルと同じレベルに落ちるのである。結局、宇野経済原則などで過渡期社会が把握できると思うこと自体、スタや革マルと同じ生産力主義なのであるが、そのことは後にふれよう。

これではピンチだといっているので以降日向は「現代過渡期世界論」

る政治経済構造は、プロ独期にやらなければわからないと言いつつ、(日向はなぜ過程ばかり知れたがるのか!)世界単一のプロ独を組織していく党の任務(資本主義批判を基礎にした)を否定しているのである。党が意識的に組織しなくても自然成長的にプロ独になるという楽観主義であり、実践的には無政府主義、反革命になるのである。

また、②③において日向は自ら方法論の破産を認めている。なぜなら、先にも述べたように、日向方法論は、カントの「先験的原理論」の地平でしかない、「論理性」「歴史性」「空間性」の三つのフアクターで、森羅万象を対象把握するものだった。ところが「現代過渡期社会論」になると一切「論理性」「歴史性」を展開できない、単なる「空間的」に存在するだけのものになつてしまふ。これは方法論の自己破産である。

「論理性」「歴史性」「空間性」の認識論に固執するならば、「現代過渡期社会」の解明のため「論理性」「歴史性」「空間性」の体系を創造せねばならず、そうすれば結局スタ並みの体制間矛盾論が相互反発相互依存にしかならないのである。

何故日向はかかる矛盾だらけの泥沼にはまり込んだのであろうか。理由の一つは明白である。それはカント主義の認識論では、世界階級斗争は解明しきれないということであり、マルクス・レーニンへの歴史的・社会的実在Vの地平の復権が必要だということである。

になると歯切れ悪くお茶をにごすだけになる。理戦九号に、日向の苦しい言いのがれを見てみよう。P 30/P 31にかけてである。

①「我々は資本家的商品経済の直接的な歴史的発展の一過程として過渡期世界における二つの異なる政治経済構造を見ているわけではない。」②「だから経済法則の三つのガイストが直接貫徹する社会として、現代過渡期社会が指定できる等は当然考えない。……当然にも過渡期世界論は本質論的には二つの異なるガイストを、すなわち現代帝国主義論と現代過渡期社会論を有することになる。」③「又、それがどちらも特殊段階論の適用をうけるのは次の理由による。まず特殊段階論は資本蓄積の差異により三つの区分を持つ。その最後は金融資本であり、その次に概当すべきものはその否定のロゴスによつてしか成立しない新しい政治経済社会(プロ独期I註)である。」④「それ(プロ独期の政治経済構造の解明I註)が実現されるためには、結局『現実がその形成過程を完結し自己を成し遂げる』時期を待つ以外なし。」

①②は従来どおりである。日向の苦しい言い逃れは③④に見られる。④にいたつては、日向はまったくブルジョア経済学者の立場に立つており、実践的には、無政府主義への屈服としてある。なぜなら、我々はプロ独を世界単一プロ独として組織しなければならず、世界単一プロ独自身、社会主義社会へ向け、更なる階級斗争の統行を内に含むからである。日向は、プロ独期にお

今一つの理由は、日向の革命観が結局、一國主義、生産力主義でしかないことである。

日向は、理戦八号で次のように言っている。「現下の労働者国家の任務は、その国内経済建設の一般法則どおりの物質化を可能とするような客観的条件の整備IIプロレタリア世界革命の完遂に求められねばならない」(P 16)この内容は、一向過渡期世界論では、不十分なながらも「労働者国家」を根拠地国家として、世界革命戦争遂行との関連で国内経済建設をする、といった内容の右翼的総括に他ならない。額面どおり受け取れば、階級斗争と無関係に社会主義社会に連続していく「一般法則」があるとされ、帝國主義の包囲がなければ、一國でも社会主義社会に移行できるとしてある。まさに世界革命は、一國の国内経済建設の「一般的法則」どおりの物質化を可能とするような客観的条件の整備」に矮小化されているのである。完全な生産力主義、一國主義ではないか。スターリニストは、コメン体制の成立でもつて、社会主義社会への突入が可能になったと思つたのに対し、日向は、それに対して全世界がプロ独にならなければ、その条件は整わないといつているにすぎない。両者ともに、一國主義、生産力主義であり、客観的条件に差異があるだけである。

更に理戦9号P 60/P 61にかけて、日向はブレオブラジエンスキトとブーリンの論争を若干紹介して「過渡期経済建設をめぐる原則的論争の我々にとつての一つの指針がこのブレ・ブーの論争

である」と評をつけている。日向はブハーリンを評価しているようだが、両者ともにスターリンに屈服していつたことをどのようか評価するつもりなのか。結局、日向も、プロレタリアエンスキームもブハーリンも、過渡期社会の階級斗争を「プロレタリアート」対「非プロレタリアート」の対立一般でしか理解しておらず、永続している革命を結局は「経済建設の一般法則」に生産力増進でしか語っていないのだ。『ゴータ綱領批判』のマルクスの見地の復権こそ必要なのであり、世界党、世界革命戦争の視点があいまいであつたにせよ、レーニン「一九一九年綱領」と「スター・ブハーリン」の差異こそ自覚されるべきなのである。

論に至つては、共産主義社会日向は、マルクス主義に対する無知蒙昧をさらけだすばかりで、ブルジョア反スタ「マルクス主義者」の御説を借りて来るのであるが（理戦八号における「抽象的人間労働」による『ゴータ』解釈）、同盟内論争の中で、大いに飛躍し、「学者」共も、なかなか言えなかつたようなブルジョア的共産主義論を大胆に提起するに至るのである。我々は理戦十号の中に日向「共産主義社会論」を見ることにより、最終的に日向が生産力者義者であることを確認しよう。

理戦十号の特徴は、宇野「経済原則」を延長し、日向式「必要労働・剰余労働」概念を創造したことである。そしてこの「必要労働・剰余労働」をものさしにして、資本主義社会はもとより、それ以前の全歴史を、そしてまた、世界過渡期——社会主義——

タリア解放を語る資格はない。

日向の資本主義美化論の基礎は資本主義社会の生産過程から抽象した「経済原則」「剰余労働、必要労働」の超歴史化にある。日向は、ブルジョアの個人ブルジョア社会の母斑の止揚を理解できないが故「必然の領域——自由の領域のメルクマールはあくまでも必要労働を人間が必要労働として意識するか否か」（P 30）であるとしてしまふ。そして「マルクスの言う必然の領域から自由の領域への飛躍がかかる条件、③生産力の発展、④なかならず剰余労働の生産性の圧倒的向上を意味するもの」（P 28）であることにされてしまふ。生産力主義丸出しではないか、日向君。生産力主義者、日向君に、マルクス・レーニンは何と言つてたかを紹介し、この章を終えたい。

「共産主義社会のより高い段階において、すなわち分業の下における個々人の奴隷的依存、それとともにまた精神労働と肉体的労働との対立が消滅した後、労働が単に生活手段ではなくて、第一の生活の必要にさえなつた後、個々人の全面的発展とともにまた生産力が成長して協同組合的富のすべての源泉が溢流するに至つた後——その時はじめて狭隘なブルジョアの権利の地平線は全く踏み越えられ、そして社会はその旗にこう書きつけるであろう、各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて——」（『ゴータ綱領批判』）

「社会が『各人は能力に応じて、各人は必要に応じて』という

共産主義をも説明せんとしたことである。ついでながら、このような試みは塚本健がすでに試みているわけだが、日向は大胆に塚本をものりこえていく。

当然のことながら、資本主義的労働過程一般の抽象から生まれたい「必要労働・剰余労働」に抽象一般をものさしにすることによつて、日向共産主義論は、資本主義美化論として結果したのである。「まさに世界Cにおいては労働日が短縮され、同時に一日における人間の生活資料の生産及び社会的フォンドのための剰余労働時間も現在と比較にならない位、圧倒的に短縮されていくものと我々は考える。そして労働が生活の第一の欲求になるとは、かかる従来の労働概念に——接的生活の生産に要される労働時間の短縮が、より広義な労働の概念すなわち、人間の自己対象化、自己確認（芸術や技術etcの精神活動一般を指す。）すなわち自己表現自己獲得のための時間を驚く程広範に作り出してゆくことだと把握する」（P 32）

「深遠なる共産主義者」日向の口から飛び出した言葉は、現実の資本主義社会の美化としての共産主義社会ではないか！ブルジョアの個人を単位としたレジャー社会！これが共産主義社会だとされる。「新宿へ帰れ！」とからかわれるのも無理はないといふものである。

「人間の自己対象化」が「芸術や技術etcの精神活動一般」だつて？こんなズブズブの精神労働の美化をやつてのける者にプロレ法則を表現する時、すなわち人々が共同生活の根本法則の遵守に充分習熟する時、そして彼等が能力に応じて随意に労働するほど彼らの労働が生産的になる時、その時国家は完全に死滅しうる。他人のために半時間も余分には時間外労働をしないように、他人より少ない賃金は受取らないように、とシャイロツクの冷酷さをもつて勘定する『ブルジョアの権利の狭隘な地平線』、この狭隘な地平線は、その時にはなくなるであろう。その時には、生産分の分配は、社会の側からの個人の受取る生産物量の標準化を要求しないであろう。各人は自由に『必要に応じて』取るであろう」（レーニン全集第二十一巻四三六頁）

第四章 「新たな規準」としての

「過渡期世界論」批判

「過渡期世界論」をレーニン『帝國主義論』に代る、戦略構築の「新たな規準」として提起していることに関して、このように『帝國主義論』を理解することの一面性をすでに一章で指摘しておいた。そして同時に、そのような『帝國主義論』理解が、「過渡期世界論」においても影響しており、日向過渡期世界論は、實際主義の内実を除去した、革マル並みの悟性的世界解釈でしかなくことを述べた。

以上の確認に立つて、彼らの「基準」とやらを見てみよう。

「新たな規準」の核心的内容とやらが次のようにまとめられてい

る。①「労働者国家」群の成立そのものが『帝国主義論』一つで現状分析的に世界対象化をなさない時代の到来」、②「残存、包囲せる帝国主義」列強に關しても、レーニン『帝国主義論』は一つの基準をなすものとは見え……あくまで『基準』でしかなくこと」、③「現代帝国主義の中後進国、旧植民地支配の様式が、『古典的』帝国主義のそれとは異り、ここでもレーニン『帝国主義論』はあくまで一つの『基準』をなすものでしかないこと」。「新たな基準」が聞いてあきれる。現象一般を百並べたとしても「基準」たりえないことは明らかではないか。しかし問題はそれにとどまらない。実はこのように現象一般を並べたて、レーニン『帝国主義論』の核心的部分を否定していくことを通し、日和見主義、排外主義の理論に転化しているのである。例えば③は典型である。問題なのは「支配の様式」ではなく「支配」していかどうかなのだ。日向一派は、ニセイムズの「情勢」の中で、「支配」の問題をうやむやにすることを通し、後進国階級斗争に對し、評論家的態度をとることによつて、徹底した一國主義、排外主義に陥つてゐる。

同時に彼らのこのような反動的性格は、「ヤルタ体制」の再編を述べても、「ヤルタ体制」そのものの階級的性格、現在の国際階級斗争にとつての位置、つまりその批判はいつさい述べない所にも見られる。

日向一派は戦後世界体制を「①米帝の核を軸とした圧倒的な軍」

とところがどういふわけか、このような現象を羅列した情勢分析Ⅱ「比類なき程」の「危機」の洞察により「過渡期世界における『三ブロック』の基本動向を全く把握できない」ということは無論ならぬ」と居直り「そのような動向の把握を基準にわれわれの戦略構築は十分に可能」とされるのである。さてその「基準」とやらを見てみれば「現代帝国主義の共同反革命の再編強化」を基本軸としたうえで、日帝はどのように再編されるか、なのであり、「沖繩返還」の「悲願」達成の代償に「経済的發展のテンポを犠牲」にした「資本の自由化」「円切り上げ」の「受け入れ」があるなどと、小ブルの危機意識をあまりたてたり、「沖繩返還」は「沖繩の本土化Ⅱ本土の沖繩化」として、実は米国の極東戦略に日本がより一層深く加担」することだ、などと、本土エゴイズム丸出しの、小ブル平和主義者の危機意識を代弁して「日米共同反革命前線基地化」(傍点筆者)だから「沖繩返還粉砕」などと、その排外主義者ぶりを發揮してゐるのである。

国際階級斗争の現段階を、フルンチヨフ並みに平和共存を軸にながめてゐる日向一派の小ブル意識で充滿してゐる頭脳には、国

事力を背景に諸列強の軍事力が反革命同盟を媒介にこれを補充しつつ強化され、②これに對抗する「労働者国家」群のソ連を軸とした軍事力強化もなされていく關係」として把えてしまふことを通し、結果的にフルンチヨフの核均衡Ⅰ平和共存という反革命を承認し、中ソ論争の地平も、カストロ・ゲバラのOLAS路線も、又ベトナム民族解放戦争も、すべてなかつたのごとくにしてしまひ、唯々、「現代帝国主義の共同反革命の前面化」のみを見ることがより、国際主義から脱落し、一國主義・排外主義に純化していくのだ。

日向一派の世界情勢の中には、世界階級斗争と日本階級斗争の連関は述べられてゐない。ベトナム戦争がでなければ、それは単に「米帝世界戦略への挑戦」としてであり、「ドル危機を拡大深化させる要因」としてのみ語られる。そして「米帝世界戦略」の再編Ⅰ日帝の動行と来る。一事が万事皆さうである。

まさに日向一派は、一國主義、排外主義である。現象を羅列するだけで、核心を拒否する。これが日向一派の情勢分析である。国際主義の最低の基準たる帝国主義、社会帝国主義の武装反革命体制解体はもちろん、現下斗われている国際階級斗争に対する態度すら出てゐない。書いてあるのは、エコノミストと同レベルのことばかりである。

むろんこのような情勢分析Ⅱ現代過渡期世界論が「新たな規準」になりうべくもない。日向過渡期世界論が確認したことは「『恐

際階級斗争の中で、戦後ヤルタ体制の枠を突破して前進している潮流が広範に形成され始めていることを見ることができず(単なる「米ソ体制への挑戦」や「スタ戦略」の「手語り」一般ではありませぬ)、逆に、このヤルタ体制が明確な国際階級斗争の敵対物になつてゐること、すなわち、ソ連スターリニストを筆頭とした多くの公認「共産党」が社会帝国主義として反革命に回つてゐることを理解できないが故に、ヤルタ体制の再編を国際主義の立場からとらえることができず、再編の中に日帝の再編しかみてとれないという近視眼を露呈するのである。しかも、その再編に對する立場は、小ブル平和主義の裏返しに危機意識なのである。

さて、このような日向一派の頭脳に反映した現象一般を「基準」に、日向は「戦略」を提出する。むろん、それがズブズブの日和見主義、一國主義、排外主義であることは察しがつくわけであるが、案の定、「ソビエト作り」を「叛軍斗争」といつた日和見主義でしかない。

ここでは「ソビエト作り」批判については展開しないが、反革命専らに見習つて「ソビエト作り」Ⅱ階級斗争などと規定するのは、やめたまえ。それは階級斗争の觀念論的転倒というものだ。そして同時に、そのような觀念論的転倒は、本格的な権力斗争を回避する日和見主義のいいわけでしかないことは、あまりにも明らかではないか。

以上確認したように、「新たな規準」とは、マルクス・レーニ

ンの国際主義の視点を拒否することを通し、日和見主義、一国主義、排外主義的政治の「基準」でしかなかったのである。

Memo

Memo

共革党(フロント)批判

はじめに

共産主義革命党へ改名したフロント派が綱領の提出をもつて構造改革派からの華麗なる変身を完了させ(？)たのもつかのま、今また人民戦線派への屈服へ回帰しようとしている。フロント派が7年10・8羽田闘争から東大闘争に至る我々を先頭にした革命左派の遺産を盗みとり、8派内においてそのあけつげな体系統性によつて市民権を獲得した地平も、構造改革派から共革党への改名の総括を「自己の政治的实践をとらえ返しつくすことを直接的契機としつつも、それを出发点としたマルクス・レーニン主義の今日的復権と国際共産主義運動・日本共産主義運動の総括というかたちにおいて——それこそ「深遠な科学的洞察をもととして」——自己を綱領的に表現しなければならぬし、またこんにちなしえているのである」(団結創刊号)というように直接的契機から綱領的体现という革命的言辞と美字麗句をもつてその空文句に満足しているうちには不断に社民共闘に迎合していく自らの馬脚を表わすだろうし、この間、入管闘争の過程の中でその一国主義の本質を止揚出来ぬまま、中核派に媚を売り、そして本年6月沖繩闘争においては無自覚にも青解派に迎合したフロント派こそまさに顕著に構改革派に回帰していく姿に他ならない。

彼等がトロツキーの戦略・戦術の誤り、革命の道すじ論の誤りを指摘し、「彼の党は不可避免的に労働者階級に戦略を与えれば必ず革命運動として前

進する。という労働者主義となり、結果的にはその戦略予見をもつてプロレタリアートを啓蒙するインテリア集団となるのである」(団結)と批判しつつ、かつ、その克服を自覚したのもつかのま青右派連合「戦略戦術主義」「ソビエト革命派」と統一戦線を結ぶことが「党の計画された戦術」であるのか。結局のところ第二次BUNDの悪しき遺産のみを受けついでソビエト革命派のかかる動揺と混迷を深めるフロント派の政治路線「沖繩返還粉砕!」「反軍国主義」の反動性をここでは明らかにしていくと同時に、団結に展開されている「BUND批判」に答えておく。

4. 8 21 6月闘争の過程で我々はまだほんの端初的ではあつたが「2派止揚」「派解体」に向けた非合法党建設の第一歩をふみだした。それ以降3派内部に中核派を軸としたダイナミックな党派再編を世界革命戦争遂行に答える革命党の建設「武装闘争の本格的開始をめぐって根底的に党派の存立を問うもの」として進行させなければならぬし、我々がかかる作業の一環として日本共産党の構改派への反動的回帰を粉砕し、右派連合「ソビエト派防衛の尖兵となる事を阻止して行かねばならない。

(一) BUND批判への反批判

の諸君こそ、レーニン主義を理解出来ない一國主義者であることを知るべきなのだ。世界プロ独への過渡を過渡として組織していくことに17年以降の革命の根本問題たる権力問題があり、プロレタリアートの一國的支配階級への転化が勝ちとられても、世界的中央集権党としての党の革命と、この党に導びかれたプロレタリア権力の世界革命戦争の機関として臨時革命政府の構築がなければ世界プロ独樹立「世界過渡期に向けた階級闘争の本格的開始がなしえない事が何ら理解されてないのである。さらに後者はロシア革命以降の過渡期世界を捨象したままタイムマシンにのつてロシア革命の時代にまいるもどろうとしているわけだが(それをレーニン主義の立場ととりちがえてはいけません)、我々は17年ロシア革命によつてプロレタリア権力の樹立があつつも、レーニン主義の歴史的限界が党一軍の世界党「世界赤軍への改組とプロレタリア権力の世界革命戦争の機関としての変革に挫折し、民族共産主義、連邦主義としてのスターリン主義を発生させて以降、スターリン主義を打倒しうる世界党建設へ向けた国際的党派闘争の展開が問われ、世界単一のプロ独裁の樹立に向けた、世界党「世界赤軍による世界革命戦争の遂行が問われ続けてきている時代として「過渡期世界」を規定し、レーニン主義の継承発展を世界革命戦争がどのような国際的党派闘争として遂行され、とりわけスターリン主義との党派闘争を軸とした世界党「世界赤軍の建設を実践していくのかとして、その地平を受けついたのである。

① 口さきだけの国際主義

我々への批判が綱領的問題の根幹となる「世界プロ独」の内容について述べられているのでまず始めに我々の「世界プロ独」統一共和制」とする立場とフロント派が批判する立場とを明らかにしていこう。

彼らは「プロレタリアの世界独裁」とは単一の世界党に結びつけられた革命的プロレタリアートによる各国内および国際関係に対する世界的独裁であつて、それは各国のプロレタリア独裁権力を実体的基礎とする世界連邦政府を構成する。それは一定の段階で各国ソビエトの下からの集中としての「世界ソビエト共和国」とならなければならない(「団結創刊号」として我々を批判したつもりになり、「われわれはレーニンの「世界プロレタリア革命の根拠地としてのソビエト権力」の原則を擁護し、同時に圧倒的なヨーロッパの党の未成熟の時期におけるレーニンのコミンテルン形成の闘いの正当性を擁護する」(同上)立場をアナロジーすることをもちつてレーニン主義を自負している。前者は結局のところ「世界プロ独」世界連邦政府」とする一國プロ独の寄せあつてもつて世界プロ独が完了し、何かアプリアリに「単一の世界党」なり「世界綱領」さえあればそれが可能になるかの如く思いこんでしまつている。世界プロ独への過渡を何か世界党や軍の意識性を言つただけでこと足りると思つている日向派同様、フロント派

フロント派の「世界プロ独」世界ソビエト共和国」なる日向派まがいのプロ独の立場は何らコミンテルン六回大会において定式化された悪名高き「スタブハ綱領」「総和革命。一國社会主義論を批判出来ないどころか、スターリニズムに屈服している構改派の本質たる一國主義者を告白しているにすぎない。

我々は国際共産主義運動の共通の目標たる世界プロ独樹立に向けて、日本における臨時革命政府の樹立も世界単一のプロ独「統一共和制にむけた過渡的権力として世界革命戦争を遂行する立場を鮮明にすると同時に、それを裏づける綱領を「世界綱領」として提出する為に、第一にその性格はなによりも資本主義批判に立脚し、「資本論」に裏付けられた「ゴード綱領批判」の立場を復活させ、均衡論的危機論と生産力主義的「世界共産主義論」を帰結させたスタブハ綱領の批判と第二に幾多のスタブハ批判者にも共通の欠陥としてある社会主義社会における党の組織する共産主義運動の決定的意義の無理解の批判を通して、この間世界プロ独の進化を進めて来た。(ISM14号を参照せよ)

フロント派の諸君の批判も「社会主義社会に残存する資本主義的母胎に対する党の組織する共産主義運動」の意義を理解しえない限り、積極的な意味で我々の耳をかたむけさせる事は出来ないことを忠告しておく。

わが綱領(共産党)にせつかく「世界プロレタリア革命の見地から各国の革命運動に責任をもつすべての國の共産主義者によつ

て構成され、諸民族の内乱と革命戦争を単一の世界革命戦争へ領導し、全世界的な規模でのプロレタリア独裁の樹立と諸民族の融合、共産主義社会の実現をめざす統一政治指導部でなければならぬ」(六、新しい共産主義インターナショナルの建設に向けて)

と共産主義インターの質を規定しているものの、「帝国主義。現代帝国主義と世界プロレタリア革命の展望」(網領二)と「日本帝国主義と日本プロレタリア革命の条件」(日本プロレタリア独裁の基本任務)(同二、三)とを切断し、臨時革命政府の性格と任務を世界革命へ集中させる党の意識性、党の改組をあいまいにさせている為、「一國プロ独樹立」に向けて「國際主義」をかざりにしている空論でしかありえない。つまるところ17年ロシア革命以降の過渡期世界の把握が決定的に欠けているため、たとえ「ボルシェビキ網領」「党宣言」にほとんど依拠した「共革党網領」によつても、國際的党派闘争にスタに対する斗いと世界に開始している武装闘争や、民族解放闘争の評価をしきれるの基準の設定が何ら出来ないものである。(実力闘争という反政府闘争の枠内での評価はしきれるとしても)そのことが世界プロ独への過渡を組織する世界革命戦争の視点を語る処までようやくして到達した「前進」を百歩ゆずつて評価したとしても、それを権力問題として党がプロ独をいかに組織するという事に無自覚な故に、世界党「世界赤軍の役割を不鮮明にさせ、網領の提出が何ら現在の國際党派闘争の到達地平を明らかに出来ず、改革「理論」と「大

をのみつくさんばかりの危機と反革命」という実質的行政権力の肥大化の現象形態を軍国主義と規定している点である。概念規定の是非を「どつたらこつたら」言う気はないが、最も反動的な事は「軍国主義」を基礎付ける帝国主義権力の情勢分析の軸となる國際反革命同盟の侵略反革命に向けた再編強化に対してプロレタリア人民を対決させることをいまいにさせる事は結果として、権力性格の部分である「反動抑圧」を強調することによつて全般の危機をあまり立て、それに依拠しながら「実力斗争」を対置している点である。即ち反軍国主義路線の主観的意図はどうあれ、例え「小ブル的反軍国主義」と「革命的な反軍国主義」とを区別し、「階級的批判」なるしるもので形式的に人民戦線派との差異を区別することに努力しても、それが社共、「人民戦線」派に対して批判しえないものであるばかりか、「実力闘争」が反政府斗争の枠から社民を突き上げる事しか意味をもつてない事を明らかにしていかななくてはならない。さて彼らの「階級的批判」の内実を見てみると、彼らは今日の軍国主義の特徴点を、①「日帝の外的事情にもとづくものでなく」その「内的衝動としてのアジア侵略、反革命の不可避的な随伴物であり、その武器である」として、一応日共の体制間矛盾論を批判し、②「排外主義を伴い」「國家機関としての天皇の再登場」というイデオロギー攻撃、③「自衛隊の急速な帝国主義軍隊化」と「政治警察の強化」とこれらの「國家中枢での比重の上昇」そして、それを追認するものとして「司

衆運動」論が何ら止揚されることなく、共革党の奥深く根がはつている事を明らかにしておく。

② 「軍事反対派になりたくないこととは」

共産党宣言の形式をとり入れて内容にかえてある。

(二) 軍国主義粉碎路線への反動性

最近フロント派は次のような主張を言っている。「対外膨張と軍備増強、及び全般的な政治反動が人民の全生活領域に感じはじられるや、軍国主義の危機が、人民の日常会話にもあらわれるようになってくる。軍国主義はあまりにも抑圧的なので広範なブルジョア的、小ブルジョア的な軍国主義批判が入りまじつて登場する」(団結No2)として、軍国主義の規定を対外衝突にさいしてもちいる武力(対外的軍国主義)とプロレタリアートの運動をおさえつけるのに役立つ(対内的軍国主義)とに分化し、「急速に肥大化して國家と社会をのみつくさんばかりとなり、究極的には一切のブルジョア民主主義の放棄へとつきすすむ(危機と反革命)に即応した國家形態への変容過程の全期間を貫く基調的な現象」(同上)をもつて軍国主義の規定を行つている。さて、引用した文章に特徴的に表われているのは「政治反動」「國家と社会

法の反動化」や「反動イデオロギー」の三点にわたつて暴露しているのであるが、日共の体制間矛盾論に対して日帝自立論を持ち出し、△「帝国主義の侵略と反革命の不統一」死亡をかけた再分割戦は危機をもたらし、その危機を革命へ」といつた危機論でしか展開してないのであり、△「スターリン主義」連社会帝国主義を頂点とした、帝国主義に対して全く屈服、迎合した条件をとまないつつ進行する國際反革命同盟の再編の中で、日帝の独自利害の追求が不断に反革命を先行させた侵略遂行体制をとり、その性格が帝国主義軍隊化を項点としつつ、帝国主義労働運動の育成、沖繩本土の分断支配、在日外国人人民への分断攻撃を通して、擬制的議會主義の内容を自らの手で変えて行くことによつて人民戦線派を形骸化した議會制民主主義へ屈服させていること、そしてそのような帝国主義の支配体制の維持に対して、プロレタリア人民を「國際反革命軍事体系」に対決し、同時に「社会帝国主義」に対決する斗いとして明確にし敵を規定し、闘いを組織していくことをむしるあいまいにさせたまま、帝国主義行政、権力の肥大化の特徴を軍事主義と固定化し、戦前の天皇制イデオロギーを「アナロジー」しつつ、「再び戦争を繰り返すな」という小ブル危機意識に立脚した「反軍国主義」に転落しているのであり、かつそこに彼等の党派性を見出しているのである。つまりその路線では、民族解放闘争、革命戦争に敵対する人民戦線潮流に対する自覚的対決を國際反革命同盟総体に対する斗いの中で把握するという核

心的な事を欠落させている為に「反軍国主義」が「革命的なもの」と「小ブル的なもの」と二種類のものがあると主観的に区別したとしても、もともと同じ地平から「目クソが鼻クソを笑う」式のものとならざるを得ない。次の彼らの主張も端的にその事を表現している。「今後国家権力の軍国主義的変容がすすむにつれて（ブルジョア民主主義）の擁護をかかげる社共共闘は一定に伸長しうるのである。（ナント!!諸君らもそれにあやかりたいかね）我々はプロレタリア革命という社共から全く異なる観点からとはいえず、軍国主義と政治反動に対してブルジョア民主主義の防衛を断乎として実力で貫徹しなければならぬ」（先駆²³号）と社共と全く異なる観点から民主主義を実力で防衛するといわわけのわからない内容こそ、彼らの本音であり、日共「民主連合政府論」を批判しえないばかりでなく、構造改革派へ反動的に回帰しているのである。「反軍国主義路線」が、人民戦線派の左傾化をあてこんだ社民基盤への食いこみを果そうとした△幅広イズム△の再現であり、その反動性は、69年安保決戦の敗北を△党の革命△として実力闘争の地平を越える階級闘争の新たな地平の獲得を目ざすのではなく、安易な道へたえず迷いこむ小ブル党派の古巣へのまいもどりであり、日向派の「叛軍行動委員会」「地区共闘創出」「ソビエト型組織建設」よろしく、向こうを張って「反軍国主義共闘会議」建設によって何か国際反革命同盟に対決しうる斗いと錯覚する事によつて、かつ大衆闘争の現在の組織形態を「ソ

と結合し、それを発展させていく党が、まさに武装蜂起―臨時革命政府樹立に向けて実現しうる非合法党として建設されねばならないのである。かかる国際主義を欠落させ△祖国の反逆△を目玉商品とする、一國主義、軍国主義粉砕路線こそ、人民戦線派への転落の開始である。

(三) 沖繩返還粉砕論の破産

沖繩闘争のスローガンをめぐる八派内部の党派闘争が「奪還派」と「返還粉砕派」に分解し、その一翼を荷つている悪しき党派の固定化された呪縛をときはなすことによつて「本土―沖繩」を貫く、真紅の国際主義を復権しなければならない。フロント派の「返還粉砕」論が小ブルの危機意識に支えられた帝国主義の返還政策に屈服した「しろもの」ではないことを「反軍国主義」スローガンと同様明らかにしていこう。

彼等は現在の沖繩階級闘争の核心的問題を次のように述べている。「一言でいうならば、復帰運動の崩壊とゴザ暴動を転機とした沖繩人民の火花の国頭―美里―下地島―高校生闘争へと連なる拡がりにもかかわらず、ゴザ暴動をも動力として騒乱罪適用を突破口に強権的支配を導入し△7年返還△をおし進める日本帝国主義に階級的反撃を十分に展開しえない△主体の危機△ということ

ビエト型組織』等としてそれが革命的組織形態と直結したものであるといつたらざるを得ないような日向派に屈服せざるを得ないソビエト主義者として位置することにあるのである。さて彼等が力説する「日本帝国主義の政治反動、国益、国防の名による人民の生活破壊と権利抑圧の中で、広範な人民大衆が生活の経験を通して実力闘争に立ちあがっている」「現在、沖繩、三里塚、反軍、入管、部落、司法、教育、婦人、労働組合の全ての戦線で生成している闘いは、いずれも日本帝国主義祖国の△国策△に対決し、祖国に反逆すること、それゆえ従来からの自らの職種、産業、地域の枠内に閉じこめられた生活のあり方をくつがえすことをめきには、けつしてつらぬきえない内実を秘めて展開されている。

だからこそこれは『革命的大衆闘争』へと発展すべき闘いなのである」（団結²号）として綱領を持つた党（確かにそうだ）と結合することによつて帝国主義打倒への道が広げられるという思いすごしは、例えば在日外国人との結合一つとつてみても、帝国主義の民族分断、排外主義攻撃が歴史的関係で蓄積されてきた抑圧国プロレタリア人民の被抑圧民族との深い断絶を利用し、拡大強化することによつて国際的・反革命的の障壁を支配のくびきとしたわけであり、真実の国際主義が現実の階級闘争の中で実践的に問われているのは、「革命的大衆闘争」の一般的発展ではなく、反革命同盟を粉砕し、日本プロレタリアートを単一の世界革命戦争へと飛躍させうる党の飛躍と準備の問題であり、「革命的大衆闘争」

である。」（団結²号）として、その△主体の危機△は「祖国復帰―沖繩防衛」か「自衛隊沖繩派兵阻止―祖国の打倒」かとして結論を二者選択として導びき、「72年返還」が全島を二分する闘いであり、後者の立場に立つて闘いを押し進める事によつて「国際主義の立場を貫き」、危機を克服しようと主張している。さて一見正当らしきこの主張も、実は、△主体の危機△を克服していく内実を情勢の客観的煮つまりを叙述することによつて捨象し、△如何にして何を克服していくのか△を一切欠落させている事に注意しなければならない。

沖繩の危機は一般的なそれではなく、歴史的に本土―沖繩プロレタリア人民が日米両帝国主義の分断支配に対して敗北し続けて来たことの「党の敗北」として総括することによつてのみ、「本土―沖繩人民」を貫く共通の敵を明確にし、階級的結束を高めていく事が出来るのである。即ち沖繩の特殊な位置、明治維新以後の本土との分断支配、差別支配が戦後ヤルタ体制の成立の過程で沖繩を犠牲にした本土決戦の回避として日本帝国主義の対米、英、仏との帝国主義戦争、対中侵略反革命戦争における敗北の過程でも貫ぬかれ、このことが片面講和（サンフランシスコ条約）第一次安保条約成立の過程では米軍政と日帝の潜在主権として国際侵略反革命同盟下での沖繩―本土プロレタリア人民の分断支配として維持されたことが沖繩人民に対する強権的な支配体制と本土人民に対する戦後議会制民主主義体制になったこと。この沖繩―本

土プロレタリア人民の敗北の総括の問題である。

この総括が「国際主義」の内容であり、フロントの諸君がいうような「祖国打倒」だけでは何ら現在の階級斗争の地平を明らかにするものではない。

それ故第一に帝国主義の支配政策に対して「本土—沖繩プロレタリア人民」の共通な敵—日米反革命同盟に対決していく基調を鮮明にしていくこと、第二にインドシナ革命戦争に敵対する反革命同盟を粉砕しつつ、アジア民族解放斗争との結合を勝ちとる中で、沖繩—本土プロレタリア人民が一体となつて闘いうる条件を創出することが前提的に踏まえられなければならない。フロント派の言っている—主体の危機—の克服は沖繩の歴史的特殊性を踏まえ、—本土—沖繩プロレタリア人民—の痛苦な敗北を国際主義に貫ぬかれた階級的団結をいかに促進させていくのかという視点に徹頭徹尾立つことによつてのみ、可能なのである。「返還粉砕」論は実はこのような国際主義のイロハが理解していない、口先だけのものである為、帝国主義の返還政策の枠を一步もでることが出来ない反動的なものである。

革命的だと自負する「祖国の打倒」派—フロントの諸君が願望する返還粉砕路線の結果するものは本土プロレタリア人民から見れば「本土が沖繩化することに対する現状維持の要求」であり、沖繩人民から見れば「本土の自衛隊が派兵される事を阻止する事」によつて、「沖繩独立」を叫ばざるを得なくなるような、何一つ

地—沖繩を武装斗争の砦にせよとのスローガンを大胆に掲げ、合法主義の枠を乗り越えなるべく非合法党の下、細胞建設に着手して

るのである。

結局のところ、フロント派の諸君が奪還論から返還粉砕論へと路線転換しても、つまり「72年沖繩返還」粉砕は「祖国の打倒」に連がるから革命的だとの空文句でしか意味付与されていないのも、彼らの国際主義の内容が帝国主義の分断支配政策の枠にとらわれているからである。彼らが中核派の奪還論を「いかなる復帰かをめぐつて様々な分岐が生じており、そのうえ日本帝国主義が、全く帝国主義的にかつ徹底的に反人民的な内容であれ、祖国復帰—返還政策を打ち出した（ベテンの返還に当る）局面においては「祖国復帰」一般、「沖繩奪還」一般は何ら革命的なスローガンたりえないことは全く明白ではないか」（団結2号P75）という批判が中核派の諸党派への反批判—諸派は返還にかかわる問題については何も論じていない—への解答たり得ないのも、—本土—沖繩プロレタリア人民—がいまこそ、戦後日本共産党の敗北の

総括、世界党建設の挫折—第三インターの限界の止揚、中共—民族解放斗争の主体的解明とその評価を通じた結合を環とした蜂起—臨革政府樹立—世界革命斗争の問題を解答していかなければならない根本的総括に一切無自覚なまま、奪還論の枠の中で、本土—沖繩人民の自然発生性に拝跪しているからである。フロント派の路線には一貫として「帝国主義の危機に対決すれば自動崩壊す

革命的でないスローガンなのである。

前者は帝国主義者に返還しないでくださいと請願する本土エゴイズムを表現することになり、後者は純化していけば「沖繩独立論」に帰結する帝国主義者の分断支配にズツポリはまりこんでいくものなのである。ここに無自覚な故に—わが党は—復帰の要求に大いに関心がある。（正しい）だからこそ、これを「祖国」の打倒—日本プロレタリア革命として提起しているのである。日本ソビエト共和国に堂々と—眞の復帰—を行なえばよいのである」（先駆230号）と誇しげに語ることが出来る党派なのである。なんという一國主義。空論主義。彼らは奪還論の裏返しとしての排外主義に転落しているばかりか、アジア民族解放斗争との国際的結合に対しても、なかなんぞインドシナ革命斗争に何一つ答え切れないのである。まさに—本土—沖繩プロレタリア人民—の敗北の総括は日米両帝国主義の侵略反革命前線基地としてある沖繩を武装斗争の砦として打ちきたえて行く事によつて現下の階級斗争の實踐的地平に答えて行くことであり、就中それを領導する党—非合法党の建設によつて武装蜂起—臨時革命政府樹立へと鮮明にプロレタリア人民を組織していくことではなければならないのである。72年沖繩返還はいままでもなく日米侵略反革命同盟の再編強化として日帝の侵略反革命遂行へ向けた、自衛隊派兵、四次防、新全総計画として文字通り、反革命軍事体系の再編強化の要であり、我々がかかる攻撃に対して 日米両帝国主義の侵略反革命前線基

る」という危機論的の革命戦略が基底におかれ、人民戦線派に対する党派斗争に敗北している事を棚にあげ、「民主主義的エネルギー」を即目的に讚美するといふ蒙昧さと、一國主義者よろしく民族解放斗争に対する主体的結合環を措定しえぬまま、それを客観的に評価するといふ腐敗の上に立つて、民主主義分子の結集—反軍国主義を媒介とした政治危機—人民戦線政府の樹立—ソビエト形成—ソビエトの蜂起。二重権力状況—ソビエト型革命を願望している。自らの党的強化と新たな権力の準備を怠りながら、危機と抑圧の中からしか革命を展望しえない小ブル投機主義者なのである。「本土—沖繩プロレタリア人民」が帝国主義者の分断政策にとらわれることなく、日米侵略反革命同盟—沖繩自衛隊派兵を阻止し、インドシナ革命戦争、中国共産党の国際共産主義運動におけるヘゲモニーの拡大に対抗して、米帝の核戦略を日帝の通常兵力で補完すべき、日米韓台反革命同盟再編の要を、—沖繩を武装斗争の砦—へ打ちきたえて行く事を持って、沖繩返還協定調印—批准阻止へと続く、沖繩返還協定粉砕斗争へ、わが共産主義者同盟が先頭に立つて闘い抜く中でソビエト諸派を解体し、単一非合法党建設を勝ちとつて行かなくてはならない。

4。8 沖繩斗争で開始した日本階級斗争の構造的転換を、さらに着実にわがものとし、沖繩へ 眞紅の国際主義を貫ぬかせ、蜂起—臨時革命政府樹立に向けて、共に苦闘の道を歩むことを明らかにしておきたい。

沖繩斗争論

日米両帝国主義の侵略反革命基地——沖繩を武装闘争の砦とせよ！

誰が立ち遅れているのか？

革共同中核派の機関紙、「前進」(第528号)は、次の様な文章を載せている。

「日帝は、……闘いの中に敗北主義をもち込み、排外主義、国家主義のもとへの思想的屈服を強いることによつて侵略への国民総動員体制を築くために必死の攻撃を掛けている」

「革命的左翼のほとんどの党派は、11月の軍事的敗北をもつて沖繩闘争に関する思想的敗北を生み出し……「沖繩闘争は終わった」という日帝の攻撃をはね返すことができないまま大勢としておし流されている」

「沖繩奪還闘争も又、七〇年代へ向けた日本階級闘争の質的転換の決定的立ち遅れと無関係ではない。否、むしろ、日本プロレタ

リアート人民の階級的弱点を最も鋭く問われる闘いである」

「前進」は、第一に、日帝は人民に「排外主義・国家主義の下への思想的屈服の強要」でアジア侵略への国民総動員体制を築こうとしていること、第二に、これに無自覚な諸党派が「11月決戦の軍事的敗北＝沖繩闘争の思想的敗北」として「敗北主義に陥つていく」こと、第三に、以上から、日本階級闘争は、「決定的に立ち遅れている」ことを明らかにし、日本の戦闘的人民に警鐘を乱打し、「階級的弱点の自覚」を促がしているのである。

つまりは、革共同中核派の諸君は、ようやく具体化し始め、「経済大國」の真の姿を現わし始めた日本帝国主義の侵略反革命に対する小ブル的危機感を「階級的弱点の自覚」即ち、「抑圧民族の構成員たる事を忘れ、国家主義、排外主義に屈服しやすい日本人民」に被抑圧、被差別人民の「立場に立て」と促がしているのである。

さて、中核派諸君は以上のように、「日本階級闘争の決定的立ち遅れ」を警鐘乱打しているのであるが、このことは、革命党派の責任の「人民へのなすりつけ」であることを明らかにし、第二にそればかりか、「立ち遅れ」の突破の鍵を彼らなりに「国家主義、排外主義への思想的勝利」に置いているのであるが、問題の真の本質をばやかすものはないことを明らかにしよう。

第一の問題は、新左翼運動の根底的な問題である。中核派の最近の目新しいスローガンのひとつは「敗北主義反対」である。例えば、我々の「非合法党建設」は、「権力の破防法攻撃」に対する大衆闘争を放棄した敗北主義だ」とか、或いは、青解の「沖繩返還粉碎」に対しては、「日帝の沖繩返還を前提にした敗北主義だ」という風に。そして、例の「大衆は遅れている」、「日本階級闘争の決定的立ち遅れ」をやかましく宣伝するのである。中核派諸君にあつては、八派共闘にあいそをつかし、旧来の「政治バクロと宣伝」を革命党派の運動の主要な基調にする傾向に対して反対している先進的労働者人民が眼に入らないのであろうか。「立ち遅れている」のは、大衆の運動ではない。末だに、政府の動向のアレコレの「宣伝、バクロ」を革命的党派の主要な基調とし、迫り来る日本帝国主義のアジア侵略反革命戦争への本格的突入という「危機」に対して、人民を武装解除させたまま突入させようとしている中核派を初めとする諸党派が立ち遅れているのである。

二年前の11月決戦の戦闘的運動を想起して頂きたい。11月決戦の敗北は、中核派の諸君が考えているように、政府、政治警察の「一日軍政」に対する軍事的敗北や、或いは、「沖繩闘争は終わった」といふ思想的敗北が核心ではない。もちろん、「圧倒的勝利」とわめきちらす事では断じてない。人民の反政府運動は、その闘争戦術や政治方針の側面から見れば紛れもなく、「武装蜂起による決着」「プロレタリアートの臨時革命政府の樹立」が問われたのであり、69年4月8日の中央権力闘争の敗北の直後、我が同盟の内から、「前段階蜂起＝臨時革命政府樹立・蜂起の軍隊建設」をスローガンに生み出された赤軍派が、戦闘的左翼や人民に熱狂的に支持され、大衆の「軍事への熱望」を広範に作り出したこと―これらは、まさしく、10・8以来の大衆武装闘争の頂点において、従来の反政府運動が「蜂起・政府問題」(権力問題)に「突き当たつた」ことの表現である。

我々は10・8以来の大衆武装闘争、反政府実力闘争の驚く程の高揚と、権力の10・8闘争時における動揺の回復過程、即ち、10・8以来の大衆武装闘争をそれこそ「根こそぎに粉碎する力量」の回復という事態に対して、全く無自覚であつたか、少ししか自覚せず、問われていた根本的な核心をつかみそこねたのである。大衆闘争の自然成長性に溶解し、「立ち遅れていた」のは、反帝統一戦線運動の主要な担い手であつた、我が同盟や中核派。ML派であつたのだ。

11月決戦の敗北は、従つて、革命党派の敗北であり、反政府運動の自然成長的發展が「蜂起・政府問題」を問うたということとは革命的左派にとっては何を意味するのかわ、ということであつた。我々は、その核心を「蜂起を実現する単一革命党」に設定しその内実を、①作られるべき党は、膨大な分業体系をもつ非合法党であり、②「非合法」の内実は、レーニン時代の「全国政治新聞」ではなく、「非公然軍事組織の建設」を環としなければならぬこと、③それは、政治警察との死闘を通じて、蜂起へ向けて労働者階級を組織化出来る、「訓練された職業革命家集団」（レーニン）で形成されること、として聞いて抜いてきたのであつた。

旧同盟は、はつきりさせなければならぬが、自らの造り出した反政府運動の昂揚を自ら、独力で吸合しえず解体した。我々がかつて領導した「反帝統一戦線」は、その全国単一の政治指導部を失ふことによつて、戦線は大きく分散化、後退の危機感の表明であるが、自らの作り出した大衆運動の自然成長性に、「我々が」追い越されたものである以上、この運動が再び政府危機を作り出す様な局面が到来した時、追いつかれないような革命家組織を、即ち、プロ独派は、単一政治首領の下に体系化された「単一革命党」を形成しなければならない。最近の新しい大衆の政治的経験は、全くこのことを要求している。京浜安保共闘の武器奪取闘争と英雄的同志、柴野君の銃殺。コザ人民の反米暴力闘争と政

府の騒乱罪攻撃による「根こそぎ」の弾圧。三里塚農民の決死の英雄的決起と、政府・友納・公団の反動的圧殺等々。

日本プロレタリアート人民は「立ち遅れている」のだろうか。運動は、10・8以来我々が死力を尽くして作り出した反政府実力闘争は今なお生き続け、少なくとも、持続している。立ち遅れているのは誰か？もはや明らかというべきではないかもつとも、中核派諸君が、自らの党的責任を回避し、もつぱら大衆に「責任を転化させる」ことを行つてゐるのに対して（我々も、かつてこの様な傾向に陥つた）「遅れているのは党派」だといつても、もつぱら大衆に対する学者的な「認識優位性」で党派性を表現する日向一派は、もつと駄目である。何故なら、大衆の中にデマゴギーに基づく幻想を煽り立てるからである。この日向一派には第二インターナショナルの学者連中、日和見主義者に対するレーニンの批判が最も鋭い。

「人々は（第二インターの学者連中）は、革命闘争を指導するための別個の非合法的な組織が必要であるという思想を理解することさえもできないほど、ブルジョアの合法性のために墮落させられ愚鈍になつてゐる。人々は警察の許可をうけて存在する合法的な団体が限界であつて、これをこえてはならないものであるかのように、又、危機の時代に、このような団体を指導団体として存続させることが、とにかく考えられるかのように想像するまでになつてゐる。ここに、日和見主義のいきいきした弁証法がある。

即ち、合法団体の成長、帳簿いじりに終始するすこしのろまな、だが良心的な俗物どもの習慣というだけのこと、危機の瞬間には、これらの良心的な小市民たちをして裏切者、反逆者、大衆の革命的エネルギーの絞殺者にしてしまふ事態へとみちびいたのである。しかしこれは偶然ではない。革命的な組織へと移行するこ

とが必要である。変化した歴史的情勢が、これを要求し、プロレタリアートの革命的行動の時代がこれを要求している。」（レーニン「第二インターナショナルの崩壊」）

さて、第二の問題に移ろう。中核派諸君は、日本階級闘争の「立ち遅れ」は、政府、権力の「国家主義、排外主義の思想的屈服の強要」をはね返すこと、帝国主義のイデオロギー攻撃に、労働者階級が「思想的に勝利する」ことによつて克服できる、と主張している。中核派の「路線転換」の特質は、「先進国主義の自己批判運動」であることは、「戦旗」前号で明らかにされたのであるが、この「思想的勝利」（敗北主義、排外主義、国家主義に対する）は、入管闘争では「被抑圧民族の立場に立ち、アジア人民から学べ」として、沖繩闘争では、「沖繩県民の怒りを自らのものとして本土でたたきつけよ」（前進）528号、学対論文）等々として表現され、文字通り「体系化」されている。この驚ろくべき「思想主義」ならぬ精神主義。

既に我々が確認したように、「立ち遅れ」を大衆に転化もているのであるから、政治方針は欠落し、（というより、「先進国主

義の自己批判運動」の体系的路線化は、政治方針が永久に出てこない。という論理構造になつてゐるのであるが）大衆に対する道徳主義的訓話に転落するのは不可避である。

今日問われている日本階級闘争の核心は、大衆武装闘争の政治的地平を踏まえるならば、蜂起＝臨時革命政府樹立の闘いへ、いかにして全ての階級戦線を統合するのか、革命党派の側からいえば、帝国主義心臓部における蜂起＝内戦の実現が不可避に突き当たらざるを得ない日米侵略反革命軍事体系を解体する非合法組織をいかなる内実で作るのか、という問題である。

武装蜂起へ向けた労働者階級の組織化（それは当然にも、非公然を要求され、現下の半合法、半平和的時代の「計画としての戦術」の政治的核心であるが）を我々は、日米侵略反革命軍事体系の革命的解体の一点に集中すること、これを「自覚的に」実現し11月決戦敗北以降、遂行されている武装闘争の政治的地平と労働者階級の政治経験を教訓化し、それを内に含む、非合法軍事組織を要にした、重層的組織＝運動を作り出すこと、これが核心である。「沖繩県民の怒りを、自らのものへ」＝中核派諸君の精神主義的訓話も、それはそれで大切なことだ。だが、被抑圧人民、被差別人民の「苦痛」を共有すればするほど、「自覚した」人民は、何をやるのか。「革命的議会議主義」による議会議進と宣伝、煽動、それとも、蜂起への労働者階級の組織化、侵略反革命軍事体系に対する「意識的」武装闘争か「膨大な民衆的規模で

の革命党建設」(『前進』528号)か、訓練された職業革命家によって構成される非合法党建設か 我々は、我が新左翼運動の「立ち遅れ」を一日も早く克服しなければならない。

国際主義を死んだ抽象へ歪曲したのは誰か?

四月闘争の核心―沖繩闘争の大衆的昂揚を前にして、われわれは、マルクス・レーニン主義の核心をなす、プロレタリア国際主義を「死んだ抽象」へと置きかえる、口先だけの「国際主義」、実際は日和見主義へ転落している諸潮流に対して生き生きとした、「具体化された国際主義」の潮流を総結集させねばならない。沖繩闘争をどう闘うのかをめぐって、国際主義の潮流と、日和見主義の潮流へ全ての階級戦線が分解しているのは当然である。何故なら、沖繩闘争の核心とは、世界革命運動の最前線を形成している民族解放戦争、日米帝国主義の侵略反革命と社会帝国主義の武装反革命に抗し、「民族解放・社会主義」を戦闘スローガンに闘い抜いている後進国革命戦争との現実的結合環を形成しているからである。つまり、日本における革命主体が、どのような国際的潮流と結合することによって、プロレタリア世界革命(単一共和制≡世界プロ独)の「現実性」を獲得するのか、をめぐって提出されている問題だからである。

ばならないのは、合法主義の批判と非合法組織の建設の見地からだけではない。わが同盟のRGによる山田弾薬列車阻止闘争や、安保共闘の米軍基地や三菱軍需生産工場に対するM×戦等々が日米侵略反革命軍事体系の解体を現在の国際主義的任務としているという点においてである。沖繩は、文字通り日米侵略反革命軍事体系の要であり、侵略反革命の「前線基地」である。これに対する武装闘争、政治的実力闘争の組織化こそ、生きた国際主義である。コザ人民の暴力闘争の画期的意義や、全軍労働者の「基地撤去」をスローガンにしたストライキの政治的意義もこの点にある。

さて、我々は、国際主義を「原則的立場」の表明にスリカえ、「死んだ抽象」へ転落させている見本を二つ紹介しよう。引用が少々長くなるかもしれないが、よく読んでいただきたい。

一つは、革共同中核派の『前進』(第528号)の論文である。「われわれは帝国主義的抑圧民族のプロ人民が、その階級意識にとつて、抑圧民族の構成員であることにより、不断にもたらされる排外主義的腐敗墮落と闘い、粉碎しつつ、いかにして革命を成就してゆけるのかということが絶対的かつ直接的に問われている。……ここに、現代革命のポイントがある。」(学対論文)

「72年沖繩返還」政策と対決し、それを粉碎する闘いは、日米両帝国主義の侵略的アジア支配と闘うことであり、日韓台関係

かつて、レーニンは、第二インターナショナルのベルンシュタイン主義者や「中央派」(「カウツキー主義者」)が、「帝国主義戦争を内乱へ」「世界戦争を国内戦争へ」と主張したレーニンに反対して社会排外主義、帝国主義に陥った時、ツインメルワルド左派を基礎に第三インターナショナルの革命的建設を訴え、次のように国際共産主義者にいつた。

「問題は色合にあるのではない。色合いならば、われわれ(ツインメルワルド左派)の間にもいろいろない違いがある。そうではなくて、潮流である。現在の帝国主義戦争に反対し、祖国敗北主義の下に、『自』国の政府に闘争をしている全ての国際主義の潮流の結集である」と。

レーニンのプロレタリア国際主義に対する態度をわれわれは断固として継承しなければならない。

結論を先に急げば、われわれは国際反革命軍事体系、とりわけ日米侵略反革命軍事体系と革命戦争で対決している被抑圧民族プロレタリア人民と連帯し、侵略反革命軍事体系を武装闘争で解体し、あるいは、解体することを今日の第一義的課題に置く潮流の総結集であり、沖繩を民族解放戦争との現実的結合環にすべく、侵略反革命前線基地≡沖繩を武装闘争、政治的実力闘争で解体していくことを、国際主義的任務としなければならない。われわれが京浜安保共闘や赤軍派の武装闘争を支持し、政府や政治警察、そして八派共闘の公然、非公然の攻撃から「共同防衛」しなければ

のもとで、日帝の抑圧と闘う朝鮮人民、中国人民と連帯し、インドシナ全域に於ける民族解放闘争を強力に支持し、連帯をかちとる闘い」(一面論文)である。

「実に今日、日帝の「返還」政策か、それとも人民の手による沖繩奪還なのかの二つの政治的傾向の分裂を大きく浮きたたせる条件におちあたらざるをえない」(学対論文)等々。

「現代革命のポイント」は、「抑圧民族の構成員であることにより不断にもたらされる排外主義的腐敗・墮落と闘い、粉碎することだつて?マルクス・レーニンの国際主義は、「階級意識の排外主義的墮落との闘い」に、「意識」の問題にまで昇天してしまつた? けだし、革共同中核派の諸君が、入管闘争に於いて、「抑圧民族としての己れを自覚し、被抑圧民族の立場に立つ」と坊主ザンゲ運動を起こし、華青闘の闘う兄弟から「抑圧民族の労働者階級人民の任務と、被抑圧民族の人民の任務との区別を」という、全くレーニン主義的な問題の指摘を「抑圧民族としての己れの自覚」にスリカエたのも、うなづかれようというものである。

つまり、先述したように「抑圧民族の構成員たる我々(プロレタリア人民)」の任務≡政治方針が欠落し、思想運動を唯一の「政治方針」(?)とする、中核派の路線転換の最近の特質である。「現代革命のポイント」等と風呂敷を広げなければ未だ、救いようもあろうが、そのように「豪語」されたのだから、我々もはつきりいわなければならない。国際主義を共産主義者や革命的労働

者人民の「思想」の次元でとどめたり、「立場の表明」にスリかえたりするのは不十分であるばかりか、実際の革命的行動が伴わない場合は空文句であるという点に於いて反動的である。

国際主義を「具体化」し、労働者階級を組織することによって「現実化」する能力が革命的な共産主義者に問われているのである。だから、我々は、国際反革命軍事体系、日米侵略反革命軍事体系と真向から対決している民族解放戦争と連帯し、それを非合法組織による武装闘争を頂点とする先進的人民の政治的実力闘争大衆実力闘争による解体を押し進めていく潮流の結集が絶対に必要であり、反革命軍事体系を武装闘争で解体しようとしている真の国際主義的潮流の形成の闘いが、排外主義を一つの潮流として外化させている人民戦線派（共社連合）が、これに屈服し、口先だけの「国際主義」実際は民族主義を革命的左派内にもちこまんとする、一切の試みを粉砕しなければならないのである。

もちろん、我々は、レーニンの意味で、つまり「いやしくも『意識的要素』の役割、社会民主主義派の役割を軽視することは、とりもなおさずその軽視する人がそれをのぞんでいようといまいと、それには全くかわりなく労働者に対するブルジョア・イデオロギーの影響をつよめる」（「何をなすべきか」という点で、イデオロギー闘争、理論闘争の意義を確認していることを付け加えておこう。

中核派諸君の以上のような「国際主義」に対する態度は、現実

「第二次ブントの鬼子」革命主義者たる、日向一派の『ニセセンキ』（第561号）である。

ニセ『センキ』は述べている。

「プロレタリア国際主義の環が民族解放闘争の環境をこえた革命戦争と帝国主義国内階級闘争の結合にあること」「それ（大衆の高度な自然発生性）は直接的には組織された暴力の質を蜂起を目ざした革命党の軍事の内実を確定することを要求しつつ世界プロ独の戦略的展望がそこにおいて問われている」等々。

共産主義者同盟の国際主義の伝統を知っている人々には、「帝国主義国内階級闘争と民族解放戦争との結合」を主張することは常識である事が分かるであろう。最近において、日向一派は、「世界一同時革命戦略論と世界同時革命の区別と連関」等といった、革マル派の「論理的同時か時間的同時か」というスコラ論議に調子づいてのついでなのであるが、「対象的世界の認識者」日向ブンドは、日本にしかないから、日本革命戦略しかない」という馬鹿げた主張を下ろしたかどうかは分からないが、ニセ、『センキ』で、「世界同時革命」をこつそりともち出してきたものである。「学的体系の継承」を党派性にする日向一派の事であるから、やはり、国際主義についても、スコラ論議しが出来ないものである。つまり、先の「常識」以上は出来ないのである。帝国主義国内階級闘争と民族解放闘争の結合が、プロレタリア国際主義の環であるなど何十回、何百回言つても、日向一派が国際主義者

的には一國主義、民族主義に陥いついていかにざるを得ないのは不可避である。「72年沖繩返還」政策と対決する闘いは、民族解放闘争との連帯の闘いであるいは「日帝の「返還」政策か、人民の手による沖繩奪還なのかの政治的分裂」等々。10・8以来の大衆武装闘争の政治的地平（蜂起・政府問題）を抹殺した中核派の諸君だからこそ、このようなことが言えるのだろう。政府の「72年沖繩返還」政府反対の大衆カンパとの闘争が、「民族解放闘争との連帯の闘い」のつはであるだろうが「環」ではないことを踏まえねばならない。つまり、「人民の手による沖繩奪還」は「返還政策そのものとの対決」となるのに及んで、中核派諸君の「気持ち」以上は言っていないことに結果するからである。彼らが、「72年沖繩返還の最大の眼目は、基地沖繩の維持である」と正しく把握しておきながら、この攻撃に対する現実的闘いが背後に追いやられ、帝国主義政府の侵略反革命戦争遂行政策に対する大衆の憤激を直接的に代弁し、丁度、「気持ちはわかる」という杜共的墮落に転落し、佐藤帝国主義政府の侵略反革命戦争の急展開に対し、何ひとつ反撃を組織できず「危機」の反動的解決、つまり、人民の武装解除と革命党派のセン滅を招来する、という重大な日和見主義に陥つていようことを意味するのである。

「日和見主義者は、自らのブルジョアの合法主義的におさわし、『特別の理論』をつくる」（レーニン）ものである。

国際主義を「死んだ抽象」へ歪曲しているもう一つの例が、

になる訳ではないことは明らかである。彼らは、この「常識」の枠内にじつと留まり、これ以上の論議をしだすと、「プロ・スターリニストだ」などとわめきちらすのである。我々が、国際主義の潮流を、国際反革命軍事体系を非合法軍事組織で解体し、「帝国主義の侵略反革命戦争を内戦」世界革命戦争へ」を政治スローガンにするだけでなく、実際に武装闘争を組織し、人民の革命的行動をこのようなものに組織していかうとする党派、人民に限定するのは、かかる日和見主義者から一線を分かつために他ならない。

日向一派の「国際主義」の現実には、「沖繩、三里塚闘争、そして叛軍闘争を叛軍行動委員会―叛軍連絡会議の組織路線の下に、恒常的武装闘争の質において領導」などとふやけたものになるのである。「恒常的武装闘争の質」だつて!! 「革命党の軍事の質」が、日向「反帝戦線」の旗幟であるように、「恒常的武装闘争の質」も、「ソビエト型組織」地区共闘」ぐらいである。このゴマカシ。レーニンは「デマゴギーは階級の中に混乱をもちこむだけに反動的である」と言つたものだが、「武装闘争の質」ほどのデマゴギーは、日向君ならではの「観念遊び」である。

国際主義を「原則的立場の表明」にスリ変えたり、「死んだ抽象」へ置きかえる実質的意義は、以上、見てきた通り、一國主義、民族主義（先進國主義）であることである。

ともあれ、我々は、沖繩闘争の核心は、何よりも国際主義の具

体化であり、日米帝国主義の侵略反革命前線基地たる沖繩を民族解放戦争との現実的結合環へ転化させていく唯一の、かつ現実的道は、日米侵略反革命軍事体系に対決する非合法組織の建設とこの解体へ向けた武装闘争、人民の革命的行動であることを、何よりも踏まえなければならない。武装闘争を維持、防衛、拡大しようとする全ての党派、戦闘的人民を一つの潮流へと形成せしめ、革命的政治闘争の基調を日米侵略反革命軍事体系の破壊へと向けなければならないのである。

日本帝国主義者が、日米共同声明「沖繩返還」にかけた狙いは、11月決戦以降、ますます明らかである。それは、人民戦線派や革共同中核派を中心とする八派共闘が陥いつているように、「施政権の返還」や「基地の態様」上の問題では断じてない。(中核派の関西における某君が、「沖繩の全てを人民に奪還する」という発言をしたことは、この事を物語っている)

「侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義」打倒の環

日本帝国主義者は、侵略反革命軍事行動に乗り出す布石を着々と打ち出している。とりわけ、米軍政の戦後25年に渡る暴虐の限りを尽くした圧政と、これに手を貸し続けてきた本土政府に対し、広範な民主主義運動を生み出し、比類のない戦闘的団結を形成し

わが、日向一派は旧構改諸派を引きついで①「日米共同反革命前線基地化」(261号)を言っているのであるが、沖繩上の問題に一面化させている点において誤りである。もう少し詳細に見てみよう。

第一点について、ニセ『センキ』は、「(ニクソン・ドクトリン)は、現代過渡期世界における現代帝国主義の共同反革命の再編・強化として、すなわち、沖繩返還に関しては、日米共同反革命前線基地化として位置づけられねばならない」と主張している。

ここでは、超帝国主義「体制間矛盾論」(「統一世界市場防衛」共同反革命)の批判は置くとしても「沖繩返還」共同反革命前線基地化(あるいは構改諸派の「侵略反革命前線基地」論)は、現在の沖繩がフリダム・ポルト作戦一つとつてみても「日米侵略反革命前線基地」たる事実を踏まえるならば実践的には無意味である。中核派諸君の様に「基地沖繩の維持」の方が、まだすつきりしている、というものである。然り、問題は、日米侵略反革命前線基地「沖繩を、いかに解体するの」かであり、又、日帝の「沖繩返還」にかけた政治的攻撃の真のねらいは何か、を明らかにすることなのである。われわれが、かつての三大スローガンを「侵略反革命軍事体系を解体して、沖繩を武装闘争の拠点へ」「侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義打倒の下、沖繩派兵阻止、返還協定粉碎を闘いぬけ」として具体化したのは、歴史的情勢の変化のみからではなくて、以上のような実践上の問題から

て闘ってきた沖繩人民を切り崩し、人民党、社会党を支柱とする人民戦線派を民族主義、合法主義「議会主義」で反革命の一翼に組織することを直接的なパネとして、国民諸階層、諸階級の反政府運動を潜在化させることを通して、一挙的に侵略反革命軍事行動へ動員していく布石として、「七二年沖繩返還」の最大のブルジョアの階級的狙いがあるのである。「平和と民主主義」のべールで人民を支配してきた日本帝国主義は、戦後の相対的安定期における支配様式の根本的転換、先行的権力再編を通して侵略反革命軍事行動に乗り出さんとしているのである。政府は、この「沖繩返還」の真の本質を隠蔽し、人民戦線派や八派共闘を「施政権問題」や「基地の態様問題」の枠内にひきずり込んでいっているのだ。「沖繩返還協定」や、「自衛隊の沖繩派遣」のスケジュール化は、日帝の侵略反革命戦争遂行に向けた一つ一つの政治プランである。

中核派の諸君は、この点においても重大な誤りを犯している。つまり、「72年沖繩返還の最大の眼目は基地沖繩の維持であり」「もう一つのねらいが、日帝のアジア侵略にむかつての国内階級闘争の「城内平和」を確立することにある」とそれ自体正しい指摘をしつつも、自らの路線上の破綻を無自覚に継承する結果、「72年沖繩返還政策との対決」沖繩の人民の手による奪還へ集約するが故に、実際においては、政府の政策的土俵にのり、「基地の態様」上の問題に陥いる、という絶望的誤りに陥いつているのである。

である。日向一派の「共同反革命前線基地化阻止」のスローガンにしろ旧構改諸派の「侵略反革命前線基地化阻止」のスローガンの無力化は当然である。生きたスローガンではないのである。

第二の点については、日本共産党や中核派が、かつて言っていた代物であるが、ニセセンキ(261号)は次のように主張している。つまり、「施政権返還によつてもたらされるものこそ、本土の沖繩化であり」、「本土の沖繩化によつて、日本全土が米極東戦略と結合した局地防衛の役割を担う」等々。日本共産党は、日本帝国主義者の「基地の態様問題」にひきづりこまれ、選挙対策用スローガンに、「本土の沖繩化」か「沖繩の本土化」かとして、自民党との論戦をかもしたものであるが、日向一派は今頃になって、この日共のスローガンをもち出して来たのも不思議ではない。何故なら、日向一派は共社連合の左翼的補完物へと転落していく組織的基礎「ブルジョアの合法主義であるからである。」「本土の沖繩化」は、本土日本人民のエゴイズムを表明するブルジョア・イデオロギーであるばかりか政府の「本土一体化」反革命総合攻撃に全く手を貸す反動的スローガンである。

「沖繩返還」とは、中核派諸君や、日向一派の諸君が陥いつている「基地の態様」をめぐる問題に核心があるのではない。日本帝国主義の侵略反革命軍事行動への乗り出す総合路線なのである。それは、イデオロギー的には、「国益・国防」自主防衛」の集約環であり、政治的には侵略反革命戦争へ国民諸階級、諸階層

を組織化する集約であり、軍事的には、「間接防衛、直接防衛」をスローガンにした自衛隊の侵略反革命軍隊。帝国主義空港や新関西国際空港建設として実行されつつある新全国総合開発計画の一環である。

われわれは「沖繩返還」攻撃を、「侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義打倒」の下に、自衛隊の沖繩派遣阻止、返還協定粉碎を軸に革命的政治闘争を組織すると同時に、一切の「沖繩返還」に対する一面的評価は、帝国主義政府に客観的に加担していることを明きらかにし、われらの傾向、潮流と断固たる態度でぞまなければならない。

まとめ

4月沖繩闘争と我々の任務は、次の三点である。

第一は、「立ち遅れている」のは、大衆の広範な反政府運動、民主主義運動ではなく、革命的左派である事を確認し蜂起を実現する単一の体系的非合法党建設の闘いの推進である。とりわけ、沖繩人民の一連の米軍政打倒、基地撤去、佐藤政府打倒の実力闘争は、第一に、米軍政の政治的力量（支配統制力）の後退と、これに変わる圧政者として日帝が登上し切れていないという政治的・軍事的空白をかいくぐり、第二に、主体的には、沖繩人民の旧来の戦闘組織たる復帰協の闘いが、人民戦線派の民族主義、議会

主義、合法主義による反革命の陣営への転化により大きく後退している結果である。「本土―沖繩を結ぶ蜂起」臨時革命政府の樹立」の階級的基礎を単一非合法党の建設として押し進めることが第一義的課題である。それは、非合法組織であり、非合法の内実、非公然軍事である。

第二の任務は、日米帝国主義の侵略反革命前線基地、沖繩を「武装闘争の拠点へ」、つまり、民族解放戦争との現実的結合環へ転化する闘いの推進である。国際主義の具体化を日米侵略反革命軍事体系に対する武装解体闘争、人民の革命的行動に集中し、口先だけの「国際主義」、実際は民族主義、一國主義の「死んだ抽象」化と闘い抜かねばならない。

第三は日米共同声明、沖繩返還は、侵略反革命軍事行動に乗り出す日本帝国主義の総路線であり、我々は自衛隊の沖繩派遣阻止、返還協定粉碎の革命的政治闘争を断々固として先頭で担い切る必要がある。「沖繩返還」前線基地化」や「沖繩返還政策か人民による奪還か」等々は、帝国主義政府の施政権、基地態様。領土問題に片足を踏み込んだ一面的な反動的把握である。

全国の労働者学生諸君！

八派共闘、ソビエト派の人民戦線左派への墮落に抗し、武装闘争の戦列を打ち固めよ！

プロレタリア独裁派の革命的復権をかちとれ！

マルクス・レーニンの国際主義の旗を、日和見主義、民族主義

から防衛し、日米侵略反革命軍事体系への武装闘争、革命的行動をただちに組織せよ！

日米侵略反革命前線基地、沖繩を、民族解放戦争との現実的結合環へ転化せよ！

四。二八首都総結集を獲ちとり、共産主義者同盟の旗の下、戦闘的団結を実現せよ！

『キム』創刊号

発行日 1971年9月25日

編集 共産主義青年同盟

連絡先 現代史研究会センキ社
TEL (06)371-3706

定価

共産主義

14, 15号

共産主義14号 定価四〇〇円

主要内容

第一部 八派解体蜂起をめざす単一党建設を

第二部 わが同盟の立脚点について

過渡期世界論・世界プロ独の綱領的諸問題

第三部 理論戦線九・十号批判

宇野経済学批判(上)

榎原均

宇野労働力商品化論批判

旭凡太郎

宇野学派の共産主義の誤謬

と日向共産主義論の破算

の根柢 鈴木路彦

共産主義15号 定価五〇〇円

主要内容

一、日本階級闘争の転換点と我々の道

一、反革命軍事体系と対決しうる国際非合法党建設へ

一、レーニン第三インター建設のための闘いと我々新しい国際主義のスローガンについて

特集、反革命マル派

の理論的基礎

A 黒田方法論・弁証法の批判

B 黒田理論の経済学上の誤謬

C 「ヘーゲルとマルクス」批判

D 「社会観の探求」批判

E 「プロレタリア的人間の論理

批判

宇野経済学批判(中)

榎原均

宇野「経済政策論批判」

旭凡太郎

ニセ「イズム14号」批判

共産主義者同盟

理論機関紙

戦旗

蜂起を指定し、準備し、

組織する「戦旗」

毎月1日・15日発行
定期購読20回1300円(〒共)
申し込み各地方戦旗社
東京都本所郵便局私書箱44号